
バトンタッチ・ショートストーリー

イツミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトンタッチ・ショートストーリー

【Nコード】

N2166J

【作者名】

イツミン

【あらすじ】

キャラクターたちが繋ぐ色とりどりのショートストーリー。

スタートラインのストレンジジャーニー（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

スタートラインのストレンジジャーニー

土色の荒野に、一陣の風が吹いた。ごうと砂粒を巻き上げて、土ぼこりを立てて、西から東へ竜巻のように風が吹いた。

空高くでは散り散りになった雲がやはり風に巻かれ、東にと流れてゆく。

冒険者ルックの旅人は、ゴーグルに貼りついた砂埃をぬぐい、バサリと地図を広げ、視線を落とした。

灼熱の太陽に照らされて、ひび割れた荒野に、旅人の影による日時計が出来上がる。

「やっぱり間違っちゃったな。どう見たってここじゃない」

ぼそりと、旅人は中性的な声でつぶやいた。

見下ろした地図は白地図。古びてところどころ変色し、畳まれていた折り目から破れそうなそれは、傍目には白紙にしか見えない。

「うわ」

ついと指を白地図に這わせ、旅人はうめき……

「コンパスのばあか！」

カランコロンと、木製のドアがベルを鳴らした。ちょっと軋んだ音を残し、開いたドアは静かに閉じていく。

昔ながらの喫茶店。

旅人はカウンターの席に座り、背負ったバッグを足元に下ろした。ゴーグルを帽子を被った額にあげると、少年のような少女のような童顔が露になった。

「すみません、未来はどう行けばいいでしょうか？」

旅人が声をかけると、グラスを拭いていた店主がジロリと視線をこちらに送った。

旅人の素直な視線と、店主の胡乱げな視線がぶつかり合う。

「……二つの足で歩いていけば、いずれは辿り着くんじゃないのか」
小さくため息をつき、店主は洗ったばかりのグラスたちの水滴をとる作業に戻る。

「むう……」

旅人はバサリと白地図を広げ、視線を落とす。

「まだ時代が違うのか、この辺りはちよつと分からないなあ。コンパスを買い換えないと、目的地に辿り着けないんだけど……。あ、ブラックをお願いします」

白地図に指を這わせ、独り言交じりにオーダーを済ます。店主はチラリと旅人の持つ地図に目をやるが、イスを回して鼻歌交じりに旅人が眺めるその地図は、店主の目には白紙にしか見えない。

店主は旅人の前にコーヒーを置いた。ブラックとの注文なので、ミルクもシュガーも添えない。

「ここがさっきの荒野でしょ？そしてここがこのお店のあるところでしょ？時代の経過を見る限り、垂直進行は合ってるから、距離と角度が狂ってるんだなあ、方角はこの際どうでもいいか……」

イスをくるくる回し、白地図を眺めて旅人はぶつぶつとつぶやく。指差す位置を何度か変えるが、どこを指してもやはりそれは白紙だ。

旅人にはルールがある。

一揃いの装備を持って、目的地に進み、辿り着かなければならないというルールがある。

投げ出すこと適わないそれは、旅人にとっては一つであり全てだ。

ルールに則って目的地に到達し、そして再び新たなルールを貰い、また旅に出る。

だから旅人はずっと旅人であり、いずれその域を越えるときまで、旅人は旅人だ。

今回目を覚ました時、傍にはコンパスと白地図と、資金や食料などの雑多な物資の入ったバッグがあった。

それらを手がかりに、旅人は目的地を目指す。

今度の目的地は、遠い未来の蒼い星。

旅が何回目か、これはもう思い出せないほどだ。いつまで続けるか、いつになれば終わるのか、旅人にはわからない。だけど、投げ出すことはしない。

投げ出してはならないと、ルールは言っているし、旅人自身もしてはならないと思っているから、旅人は投げ出さない。

そして、なぜか分かる。

いつか旅が終わった時、旅人は名を名乗る権利と、一つの実在を与えられるのだと。

自分の生まれるその日までの旅なのだこれは。

「よしっ！もうこうなったら少しずつ進んでいくしかないか」

旅人は意を決し、白地図を畳むとゴーグルを装着した。

チャリン……

硬質な響きに店主は視線を旅人の方に送る。

すると旅人はそこには居らず、カップの中で揺れるコーヒーと、それに釣り合うだけの金額が置いてあった。

土色の荒野に、一陣の風が吹いた。ごうと砂粒を巻き上げて、土ぼこりを立てて、西から東へ竜巻のように風が吹いた。

空高くでは散り散りになった雲がやはり風に巻かれ、東にと流れてゆく。

冒険者ルツクの旅人は……

「コンパスのばあか！」

ぐるりと回って戻った荒野に、ちいさな叫びが響いて消えた。

頼りにならない指針の導く、その旅の続きは終わりなく……。

幸せ仕立てのミルクコーヒー（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

幸せ仕立てのミルクコーヒー

カランコロンと、木製のドアがベルを鳴らした。ちょっと軋んだ音を残し、開いたドアは静かに閉じていく。

昔ながらの喫茶店。

馴染みの客が入ったときに、客は他に窓際に座るおさげ髪の女の子だけだった。

馴染みの客はカウンター席に座る。

「相変わらず流行らないね、この店は」

オーダーもしていないのにコーヒーを持ってきた無愛想な店主に、客は声をかけた。この店は常連ばかりがやってくるので、頼まなくても欲しい物が勝手に届く。

「流行ってもらっても困る。変な客が増えるからな」

「どうしたの、マスター。なにかあった？」

しかめ顔で言った店主に、客は聞く。普段から怒ったような顔をしている店主は、今日は普段にも増して機嫌が悪そうだ。

「未来はどこだとか抜かしやがる客が来た。なんぞの哲学でもやってるのかもしれないが、自慢のコーヒーを啜りません」

「はは、そいつは困ったもんだ」

客は笑ってコーヒーを一口飲んだ。おかしい質問をした客にいらだっているのではなく、コーヒーに手をつけなかったことに店主は腹を立てているようだった。

「すみません！お金おきます！」

と、おさげ髪の女の子が突然声を上げ、あわただしく席を立ち、店を出た。ガララランと、ドアベルが激しく鳴る。

「見る、一見ときたらあんな客ばかりだ」

眉に密度の濃いしわを寄せ、店主はぼやく。

「じゃもう閉めちゃったら？俺たちマスターの家に行けばさ、この味は楽しめるんだし」

くるりとカップを回し、客は香りを楽しみ、一口コーヒーを飲む。店主は無言でコーヒー豆を挽きにかかる。閉める閉めないの話になると、店主は決まって応えない。その無言が「閉めない」と言っているのだが、店主は口に出すことを拒んでいる。

「奥さんの誓い？もういいじゃない。亡くなって何年たつの？嫌ならさ、やめちゃえばさ」

「嫌だとは言つてない！」

しまったと客は思ったが、しかし既に店主は激昂していた。普段ならばこの手の話題もかわすだけの度量を持っている店主だが、この日は不機嫌だったことを、客は失念していた。

「悪かったよ。でもマスター、あんたもそろそろ体に気をつけないといけない歳だぜ」

客は残りのコーヒーを呷り、

「じゃ、またね」

代金を置いて店を出た。

店主は一人残された店内で、小さくため息をついた。

馴染みの客が、自分のことを思つて言ってくれているのは分かる。最近階段の上り下りも辛くなつてきているし、立ち仕事は腰に来る。年齢的に、限界が近づいているのも確かなのだった。

先立つた妻のため、店は続けているが、潮時はそろそろだ。

それを自覚しているからこそ、少しのことで苛立ちが湧き上がってくるのだろう。

本格的なコーヒーを売りにしているこの店は、ブレンドやレギュラーといったメニューばかりで、通好みの商売をしている。しかし、しぶしぶながらメニューに載せているソフトドリンクの欄に、ミルクコーヒーが並んでいるのだ。

気付くものこそ少ないが、気付いたものは店主に聞く。

「こだわりのコーヒーを、ミルクで割っていいのかい？」

聞かれるたびに、店主は応える。

「そいつは幸せ仕立てだから、いいんだ」

その時ばかりは、仏頂面の店主が少し微笑むのを、常連客は皆知っている。

昔—まだこの店が店主のものでなく、彼が従業員の一人だったころ、その女性は泣いていた。

ほかに客の居ない、夜中だった。女性が帰ろうとしないので閉めるに閉められず、彼だけが店に残っていた、深夜に近い時刻だった。

何かがあったのだろうとは彼も思ったが、とうとう女性は泣き出した。

無口で真面目な青年だった彼は、泣き出した女性にどうすることも出来なかった。

だけれど、たまらなく何とかしてあげたくなっていた。

数時間、二人きりで過ごしたからだろうか、会話などなかったが、そこには絆が生まれていたような気が、彼にはしたのだ。

あれこれ手を尽くしてどうにもならず、店自慢のコーヒーにミルク

クと砂糖をぶち込んで出したとき、やっと女性は笑顔を見せたのだ。同じものを飲まされて彼は甘ったるいと思ったが、女性はこうつぶやいた「幸せの味がしますね」と。言われて彼も、甘ったるいけど幸せだなと、そう思った。

偶然居合わせた泣く女と喫茶店の店員。

笑いながらミルクコーヒーを飲み、それが始まり。

いつまでもこの幸せの味を、誰かに飲ませてあげてくださいね。そう言われたから、ずっとそうしている。

困った一見の客が来ても、だから店を閉めるわけにはいかない。

やつらに何かあったとき、ミルクコーヒーを店主は出す。なぜか飲んだら笑顔になれる、とっておきの幸せ仕立てを。

値段は誰でも払えて払えない「あなたの笑顔」。

そんなことメニューに書くのは恥ずかしかったが、事実なのだから仕方がない。

だから店を閉めるわけにはいかない。

困った一見の客が来ても、だから店を閉めるわけにはいかない。

放課後図書室のワンダーガール（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

放課後図書室のワンダーガール

「すみません！お金おきます！」

走り去ってゆく男を窓の外に見つけ、あたしはテーブルにお金を置いて喫茶店を飛び出した。コーヒーはまだ半分くらいしか飲んでなかったけれど、もったいないけど仕方ない。

閑散とした商店街を走る、若いジーンズの男。あたしの目的とした、連続殺人犯だ。

あたしはメガネを外し、上着のポケットに入れる。

全力ダッシュをすることで、黒髪三つ編みの地味な高校生女子が、あつという間に変身する。

大きめのブレザーと格子模様のスカートが、ぴっちりしたデザインの未来的なスーツに。髪の毛はなんと、恥ずかしながらもピンク色に変わるのだ。

足だって、とっても速くなる。

あたしはそう、女の子の憧れ魔法少女！

ではなく……

「その人！待ちなさい！」

この変身能力を使っているときは、裸眼でよく見える。男は路地裏に逃げようとしているけど、あたしは今スーパーヒーロー並なのだから、追いつくこと一瞬だ。

「ひっ！」

ジーンズの男を抱えて、あたしはビルの屋上に飛び上がる。

「ひいひい！」

男が声を上げるが、そんなことお構いなしだ。だって、道を外れたようなヤツに、かける情けも手加減もないのだから。

「す、すいません！でも俺！」

屋上に投げ出された男は、尻餅状態でお尻で這って逃げようとする。

「あなたねえ！」

あたしは指を突きつけ、言った。

「早く人を殺しなさい！」

図書委員会の呼び出し状が届き、あたしはまたかとげんなりした。そして同時に、ちよつとだけ気分が高揚した。

委員会の仕事は面倒だけれど、だけれど力を使っているときは爽快なのだ。

だからちよつとだけ気分が高揚し、同時にまたかとげんなりしたのだ。

「ごめん！最近お仕事が多くて。でも、そう仕向けてるわけじゃないの、分かって！」

図書室に着くなり、いきなりの平謝りをかまされる。

「はいはい、分かったから委員長」

平謝りしていた委員長が頭を上げ、あたしを見る。委員長はショートカットの体育会系で、図書委員長とはとも思えない。体育委員長と思ってる人だってたくさん居る。あたしはいえ、分厚いメガネに黒髪の子三つ編みで、典型的な優等生キャラで、だからこそこの仕事が出来るとも言える。

「今度はこの本なんだけど」

委員長は「貸し出し不可・調整中」の紙が貼られた一冊のハードカバー本を差し出した。タイトルは「探偵緒方宗二郎 姿なき連

続殺人犯」。またこの手の本かと、げんなりした気持ちさがさらにげんなりした。

「犯人の男ね、はいはい分かりました」

仕事内容を聞くまでもなく、あたしは本を額に当てる。

と……

パン！

頭の中で光が炸裂して……

「人としてやりたくないことだ！それは分かります！でもね、あなたが人を殺さないと、物語が進まないの！あなたは筋から外れてるの！」

あたしの説教は続いていた。

ジーンズの男は正座して、しょんぼりしていた。

「図書室の本という自覚を持ってください！この本を待ち望んでいる人がたくさん居るんですよ！」

「はい、すいません……」

説教をしながら思う。この人、殺人なんてしそうにないなあ、とまったく、作者にも困ったもんだ。役柄に似合わない人物をあてがうから、こんなことにもなるのである。

「これからすぐ、資産家を殺しに行きます。本当にすいませんでした……」

男はしょんぼりしている。悪いことをしたくないために逃げて、そして怒られるなんて、こんな不条理もないものだ。

あたしだって、何でこんなことをしなければならなかったかと思っている。

本を読むのが好きだから、最初に本に入れることが分かった時はとても嬉しかった。そんな力があることを幸せに思った。

でもやってることといえば、完結を間違った小説を元に戻す、地味な裏方作業くらい。

毎回毎回「職務放棄」のキャラクターの愚痴を聞くはめになり……。

最近ではどんな小説を読んでも「この人たちも大変だなあ」と、登場人物に同情してしまうのだ。

だから、本の中に入れる人たちは、自慢するのをやめたほうがいいよ。あたしみたいに、「図書室のワンダーガール」なんてあだ名がついて、面倒くさいことになっちゃう前にさ。

ほんと、本は読んどくだけのほうが幸せだって話。

頭の中で、現実に戻るための光が……

パァン！

好きと嫌いのハーフライン（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

好きと嫌いのハーフライン

キスはラズベリーの味がすると誰かが言っていた。

でも、それは多分嘘だ。もしも本当だったとしても、私はラズベリーを食べたことがないので、実際のところは分からないだろう。

ま、キスの味が甘酸っぱいっていうのは結局のところ幻想だけども、どうせキスなんて、自分の唇を舐めたのと同じ味がするんだ。もしかしたらラズベリーがそんな味なのかもしれないけれど、私はそんなフルーツは嫌だ。

薄っすら暗い図書室の中、勝手に節子と名付けたパソコンのキーを、ぱちぱちと打ち込む。

図書委員会の業務も、とっくに慣れた。

私は陸上部の体育会系なので、休んでるうちに図書委員に決まったときは絶望を感じもしたけれど、今じゃ余所見をしていても正確にキータイプが出来るほど事務作業が上達したのだ。

だけどそれは私が真面目だったからではない。

「委員長。これ、書架に戻しときますね」

貸し出し受付のカウンターからこっそり覗いていると、彼は私に言ってきた。彼の居る大きな机には、積み重ねられた返却された本どうやら彼は私の視線を、仕事の催促と受け取ったらしい。

「あ、ああ、うん、お願いね」

取り繕って笑顔を作り、あわててなんでもないように振舞う。

節子の画面には、何の意味も成さない文字の羅列が列挙され、現れては消えていくのを繰り返していた。

私は実は仕事が全て終わっていて、それでも図書室にまだ残っているのは実は……。

彼は窓際男子と呼ばれている。

いつも物憂げな視線を、窓際の席からグラウンドに向けているの

で、そう呼ばれている。

そう、全部こいつのせいなのだ。

この一学年後輩の、ひ弱そうな男子生徒のせいなのだ。

初恋に溺れる乙女のようにキスについて考えるのも、タッチタイプが上手くなったのも、張子の中に存在しない仕事を閉じ込めているのも、全部窓際男子のせいなのだ。

私は実は、彼に視線を奪われている。

彼とのキスはどうだろうと思うし、彼を目で追っているからタッチタイプは勝手に上手くなるし、彼のことを知りたくて仕事もないのに図書室に来る。

私は彼が好きなのか？

ひ弱っちい窓際男子が好きなのか？

実は、それがよく分からないのである。

私は一冊のハードカバー本に、紙つぺらをセロテープで貼り付ける。本のタイトルは「探偵緒方宗二朗 姿なき連続殺人犯」。人気の小説らしいけど、私は読もうと思わない。どうせ体育委員長と間違われるくらい図書室の似合わない女だし、そもそも元から本を読むのはあまり好きじゃない。

窓際男子は本当に存在しているのか怪しくなるくらい、音もなく図書室を移動し、その腕に積み重ねられた書籍を書架に戻していく。

ひ弱そうだと思っていたが、重そうな本を何冊も抱えて涼しい顔をしているあたり、彼は実は結構筋肉があるのかもしれない。

「委員長、今日部活ですよね？」

静かな声でも、人気のない図書室ではよく響く。窓際男子は女子の中ではちよつとした人気で、さすがに容姿はそれなりにいいが、声だつて結構綺麗だ。

「顔出すつもりだけど、最後の大会も終わってるから走らないよ」
じつと追いかけていた視線をあわてて節子のモニタに戻し、私は言った。休ませていた手も、動きを再開する。ぱちぱちぱち。私は仕事をしていますよ。

「いいですよ、あんなふうには走れるのは。僕、体育は苦手だなあ」
視線をそつと戻すと、窓際男子は小さく笑っていた。

むう、可愛いじゃないか。

走るのが苦手となると、手取り足取り教えたくなくなってしまう。そんなに速い選手ではないけど、陸上一筋に生きてきたのだから、ノウハウは持っている。

窓際男子はちよつとかつこよくてちよつと可愛くて筋肉も意外とある。

クラスの男子を引き合いに出して「窓際男子が彼氏にふさわしいか」を試してみると、いつも決まって「悪くはないけどちよつと物足りない」となる。

だから私の中で、窓際男子はちよつとかつこよくてちよつと可愛くて筋肉も意外とあるだけ、という評価にいつも落ち着く。

いい男じゃないから好きじゃないもん。

子供じみた言い訳を作り上げている。

ええ、本当は好きですよ。

私は窓際男子が好きですよ。

好きと嫌いの真ん中のラインを、いつも行ったり来たりしている振り。

本当は好きだと直情的に飛びつきたいけど、恋愛なんてしたことないからわからないから、好きと嫌いの真ん中のラインを、いつも行ったり来たりしている振り。

よくわかっていない振り。

恋愛感情を上手く処理できるようになるまで、私は窓際男子なんて、好きでも嫌いでもないですよ。

あんなもの、ちょっと可愛いだの後輩。

さてさてこの気持ち、卒業までに果たして整理がつくのかどうか？

覚えてなさいよ窓際男子。

うずうずしているこの気持ち、本当はメーター振り切っちゃってるんだから。

こっそり窓際男子を眺めみて、好きと嫌いのちょうど真ん中。

私はゆらゆら揺れる振り。

好きと嫌いで揺れる振り。

マキナの絶対零度（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

マキナの絶対零度

学校の屋上の給水用高置水槽―つまり給水タンクだ―の上に、濃紺の長い髪を風に揺らした女生徒が立っている。存在感の希薄な白い肌に、挑戦的な面差しを持った、すらりと長身な女生徒だ。

彼女の名前は節子。しかしながらこの名前は便宜上つけられた仮の名前で、名付け親が問いかけやすいようにつけられたものだ。

「ねえ節子、私ってば、あいつのことが多分好きなのよ」。

彼女の名付け親は、彼女に向かっていつもそう言う。言われる度に節子は返答かなわぬ体で、

「知ったこっちゃねーわよ。そんなら早いとこ告白でもすりゃいいんだわ」

とか思っている。

ふわりと給水タンクから飛び降りて、節子の体は屋上の床にしみこむように消えていった。

彼女は実は、存在しない。

仮の名前と仮の体を持って、気まぐれに校内を散策する彼女は、誰の目にも触れることはない。

彼女の正式な名前は P C C H 4 0 N

その正体は実は、この学校の図書室に備え付けられた、パーソナルコンピューターだ。

名付け親があまりにも「ねえ節子」と呼びかけるため、いつのまにやら自我を持ってしまった、女子高生型パーソナルコンピュータ。それが節子だ。

誰の目にも触れることのない節子はだけれど、時折誰かに目撃され、今では「謎の美少女」として学校の七不思議のひとつに数えられている。誰にも見えないものを見てしまう人間は、少数だが確かに存在するのだ。

幽霊と一緒にたにされ、学校の七不思議に属してしまっている節子はそのことを、

「似たよーなもんだし、仕方ないんじゃないの？ま、あたしは幽霊なんて信じてないけどね」

とか思っている。

夕闇迫った暗がりの中、節子は自室である図書室に戻ってきた。

生徒達が数多く残っている間はふらふらと校内を歩き回る節子だが、暗くなり人間の数が少なくなると、出歩く楽しみがなくなり図書室に帰る。

これからは人間観察以外の、もう一つの楽しみが始まるのだ。

「着たわね」

ニヤリと、不適に節子は笑う。

図書室の窓の外。

校門の見えるグラウンドから、ごくごくとうと光の尾を引いて、いくつかのミサイルが飛んできていた。

「以外にも敵は正面から来やがるのね」

校舎に向かって飛んでくるミサイルは、しかしバリアにはじかれて、爆発、四散するも、衝撃は節子には少しも届かない。第二射、第三射と立て続けにミサイルは発射されるが、そのどれをとっても節子の仕掛けたバリアを突破することは出来なかった。

と――

「なるほど、そうくるか」

節子は別の敵を察知する。グラウンドからミサイルを掃射する一団とは別に、裏口から何人かの敵が侵入してきているのだ。

節子は思案する。ミサイル攻撃が止まない限り、正面のバリアを外すことは出来ない。敵もミサイル攻撃に相当の兵力を割いているので、忍び込んできた敵兵は数が多くないが、こちらに残りの兵力が少ないのだ。

図書室まで攻め込まれば、節子の負け。

敵は学校を守るスーパーヒーローと自らを位置づけており、そのために学校に巢食う異質の存在、節子を倒しに来るのだ。だから図書室に攻め込まれてはならない。なにしろ、図書室には節子自身が動かぬ箱として鎮座しているのだから。

節子は思案した結果、裏口から図書室へと進む最短ルートにトラップを集中させることにした。逆のルートからはらくらくと侵攻を許すことになるが、それは致し方ない。敵も長引いてはミサイルが尽きるので、短期決戦を仕掛けてくるだろう。それに節子は賭け、最短ルートにのみトラップを集中させたのだ。

グラウンドの攻防に目をやりながら、節子はパソコン上の自らの画面に学校のマップを表示する。一階左奥が裏口で、三階中央が図書室だ。

「まったく、やつらもしつこいわね」

ぶつぶつと文句を言いながらも、節子は嬉しそうに笑う。睡眠をとらない節子にとって、少しでも暇を潰せるのは良いことだ。

敵は誰にも見えないものをみてしまう、少数の人間だ。節子を偶然見かけ、敵と認識した人間だ。

だからこうして、節子と敵は闘争の日々を送っているのだ。

「む……」

不意に節子の表情が曇る。

トラップが突破された形跡もないのに、一階フロアが完全に制圧さ

れたのだ。敵は裏口から入ってすぐの階段から二階に上らず、遠回りして右サイドの階段から攻めてきているようだ。

一度設置したトラップは動かすことが出来ないで、節子はこのまま手をこまねいて見ていなければならないことになる。

やがて敵は三階に到達し、慎重な足音が節子の敏感な耳に届いた。

敵はじりじりと寄ってきて、図書室の扉に手をかけ……

節子はガラリと図書室の引き戸を思い切り開けた。

そこには扉に手をかけた敵と、そいつに背中合わせで左右を確認する敵がくっついて、三人で仲良く凍り付いていた。

「勝利を確信した時こそ慎重になれってね。そこんとくにちょっとだけ、コールドトラップを仕掛けといたのよ」

ちよいちよいと扉のつつてを指さし、

「たくさんハンデをあげたのに、人間もまだまだつつーことね」
にんまりと彼女は笑った。

冷淡に見える彼女の、子供のような笑顔だ。

『だあ！また負けたよ！』

ピコンと、節子の画面上にチャットが届く。

全てはネットワーク上の出来事。

節子と敵は、仮想空間の陣取りゲームで遊んでいるのだ。

今日取り合っていたのは家庭科準備室。

マップ上の家庭科準備室が、ピコンと音を立てて節子を示す赤色に染まった。

これは子供の遊びだ。

生まれたばかりの寂しい節子を、退屈させない為の遊びだ。

実は生まれてまだ半年の、寂しい子供を退屈させない為の遊びだ。

「ま、また今度ってことで……ね？おにーちゃん」

大人に遊んでもらった節子の、満足な一日が終わっていく。

異世界魔術師のライフマネジメント（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

異世界魔術師のライフマネジメント

その男は今日も、机に肘を着いて外を眺めていた。

ゆるゆるとした風が、ゆるゆると雲を運んでいく様を、至極のんびりと見送っている。

毎日が続いていく中で、とりたてることのない日常の風景が、眼前でただ過ぎてゆく。

とある県立高校の、二年生の教室。

坂の上にあるその学校からは、生活の匂いを漂わせる住宅や商店の並ぶ町が見下ろせた。

彼はだから、窓の外を眺めるのが好きだ。

全て日常がそこにあるから、窓の外を眺めるのが好きだ。

眉目秀麗な彼は、いつも窓際の席から外を眺めているため窓際男子などとあだなされている。その様子は休み時間のたびに女子生徒がその姿を確認に来るほどで、ある種の名物だ。

時折振り返っては目が合い、慌てて逃げるように去っていく女子生徒を見て、彼は平和だなあといい、だからこそ彼はこの世界が好きだと思う。

招かれざる客が訪れることを除けば、彼にとってこの世界は、理想であるとさえ言っても過言ではない。

ゆらりと背後で何かが動いたのを感じ、彼はおもむろに立ち上がった。

きゃあきゃあとはしゃぐ女性と達に優しげな笑顔を送り、彼は定位置である窓際から移動する。

茶色がかった髪と、同色の瞳を持つ彼が動けば、モーゼの十戒。女性と達の波は割れて道が出来上がる。

彼の向かう先は人気のない屋上。

立ち入り禁止のそこは何人も出入りを許されないはずであるのだが、彼の前にはどんな扉も閉ざすことを許されない。

錠がかかっているはずのドアノブをがちりと回し、彼は屋上に出る。

空気の奔流が開け放たれたドアの向こうに吸い込まれ、やがて鉄製の扉がギィと軋んで元の形に閉ざされた。

空を見上げる彼にもとに、ゆらり、人影が歩み寄る。まるで空気に溶け込んでしまったかのような、存在の希薄な騎士の人影が。

「やあ、学校七不思議」

からかうような口調で彼は言った。

『ご挨拶ですな、魔術師殿』

存在も半透明なら、言葉だってそうだ。騎士の声は、水中で聞いているかのように、輪郭がおぼろげだ。

「あなたは最近、こつちでは有名ですよ。校長室においてある騎士の甲冑が夜な夜な歩き出しているよね」

『甲冑などと、無礼極まりない話です。私にはきちんと体がある。しっかりと確認してもらいたいものですな』

「噂なんて、そんなものです。曖昧模糊としていて、確かなものなどそこにはない。知ってます？校長室に、甲冑なんてないんですよ」

騎士の不満げな声を聞き流すかのように、彼はくすくすと笑った。「用件は、いつもと変わりありませんか？」

彼は騎士に問うた。

騎士は異世界から彼に会いにきている。

『魔術師殿は、やはり我が王に仕えられる気はありませんか？』

「うん、ないです。何度きてもらっても、僕に出来る返事は変わりませんよ」

『あなたならば、世界を治める王の片腕になれるというのに……』

彼は優秀な魔術師だ。強大な魔法を使い、そのつもりになれば一つ国を滅ぼせるほどの、絶大なる力を持った魔術師だ。

だが彼は……。

「両親が優秀だっただけです。僕の力はただの授かりもの。僕が手に入れたものじゃないんです。だから、僕はあの世界が嫌いだ」

強大な力がある故に利権争いの渦中に飲まれるのを嫌い、彼は自身の世界から飛び出し、こちらに来たのだった。

半端な術力を持った人間ならば騎士のように曖昧な姿でしか現れることの出来ない異世界だが、彼のような魔術師には、全て以前の世界どおりにすることはたやすいことだ。

「この世界はいい。術力を持つものこそ少ないけど、だからこそみんなが対等に努力し、手に入れることができる。だから、この世界はいい」

彼は町並みを眺めた。

家々に生活があり、汗と涙の賜物があり、未来がある。

もって生まれたもので全てを判断された以前の世界とは違い、こちらの世界では彼は、努力で勝ち得る喜びがある。

魔術というものは、彼にとっては歩くよりも易いことだった。

天才魔術師として幼少のころから鳴らした彼は、しかしある時気がついたのである。

生まれてこのかた、僕の残したものは一つとしてない……と。

優秀な両親の才覚は、何も魔術に限ったことではなく、明晰な頭脳にも引き継がれていた。

そのことが、皮肉を彼に気付かせた。

努力をしているものがある。

畑に種を撒き、水を遣り、日ごろから目を配ってやっと作物は実る。

努力をしているものがある。

体を鍛え、道場に通い、剣の精神を学ぶことで騎士は生まれる。

彼の得意とする魔術でも、努力はなくてはならないものだ。

書物を読み、己の中の知力を探り、魔術は身につく。

術力とは本来、はじめから備わっているものではなく、生を受けたあとに自分から呼び起こすものなのだ。

だが彼は、歩くより早く、自分に術力が既にあることを知った。

そして、その力を使い生きてきた。

彼はそれだけだった。

彼にはそれだけだった。

欲しいものを手に入れようと、手を伸ばしたことさえなかった。

それは間違っていると、賢い彼は気がついてしまったのだ。

「苦勞してますけど、でも、何とかなってますよ。これが結構、楽しいんです」

彼は言って、そして笑った。

希代の魔術師は、才覚だけの世界を捨て去ったのだ。そして異世界で別の人間となり、自らの力で道を切り開くことを決めたのだ。

生まれた世界を捨ててまで、選んだ道なのだ。

『仕方ありませんな、今日のところはこれで帰りましょう』

承服せざるを得ないなど、騎士は思った。これほどまでの真摯を見せられては、反論の余地がどこにあるうというのだ。

「ご期待に添えず、申し訳ありません」

『いいえ、魔術師殿にも選ぶ権利がありましょう。それは致し方ないことです。ですが、我が王を説き伏せるのが、これが少々難しい。有無を言わせぬ理由があれば、少しは事も運びやすいのですが……』
騎士が苦笑いで言う……

「ああ、それなら、ええつと……」
と、やや口ごもりながら彼は

「惚れた女と離れたくない、っていうのはどうですか？」
頬を染め、恥ずかしそうに言った。

その瞬間、彼は年相応の、思春期の少年そのもので……

『はははは！それはどうしようもありませんな！』

思わず騎士は笑ってしまっていた。

大人のように落ち着き払い、つんとしている彼の、その実の純真にして無垢な精神に触れたような気がして、騎士は思わず笑っていた。

そして、案外理由の全てはそこにあるのかもしれないと、そう思った。

しかしそれを誰が止められようか。

世界一つの行く末よりも、恋の病が重要だ。

有限世界のマイノリティ（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

有限世界のマイノリティ

私には、忘れられない人がいる。

まだ中学生だったあのころ、ふとしたことから気になって、今の今まで忘れられない人がいる。

彼は自由だった。

「だからさ、喋る猫だよ」

「だから、そんなのはいないって言ってるの」

「いるんだって」

「あれだろ？食いもん貰ってうまいーとか言うあれだろ？TVでやったりしてるさ」

「いや違うって。もつと流暢に喋るんだよ。恐縮です、とか」

「梨本かよ」

「違うよ猫田さんだよ」

「猫田さん？なんだよそれ」

「名前だよ名前。本人がそう言ったんだぜ。いや、本猫？」

「言うかよ。おまえなに？本気で言ってるの？」

放課後の、西日の傾いた教室で、彼はそんな話をしていた。

偶然居合わせた私は、彼らは冗談で言い合っていると思っていた。

だけど彼は、冗談を言っているではなかった。

喋る猫などというおよそ信じられないものを、彼はまっすぐに、

正直に、全て信じていたのだ。

なぜなら彼は、突然美術部に入ってきたと思ったら、毎日一心不乱に猫の絵を描いていたのだから。

元々美術部だった私は、彼が日々量産するグレーの虎猫の絵を、彼が中途入部してから卒業するまでの二年間、毎日見せられることとなった。

最初のころは幼稚園児の描いたようなへたくそなイラストだったグレーの虎猫は、やがてどこかの待合室に飾っていてもおかしくないくらいの油絵に進化したものの、それらは同一人物（同一猫？）で間違いなかった。

おそらく、それが猫田さんなのだろう。

彼は何度も、その猫田さんにあったことがあるという。

彼は冗談を言っていなかった。

「猫田さんはさ、謙虚なんだよ。すごくいい人でかつこいいのに、謙虚なんだよ。いや、猫なんだけどさ」

絵を描きながら時折、彼はそうやって猫田さんの話をしてくれた。猫田さんは世界を渡り歩き、さまざまな人のところで過ごし、毛繕いをしてもらい、生きているのだという。

失礼な話、彼はちょっとおかしいんじゃないかと、私は思っていた。

だけれど、彼はすごく自由だった。

この狭い世界の中で、多数派に飲み込まれている彼は、だけれどすごく自由だった。多数派に迎合し、呼吸を合わせて生きている私とは違い、息苦しさの欠片もなく、ただひたすらに自由だった。

そのうちに私は、彼がおかしい人なのではなく、彼が自分の中だ

けの価値観で動いている人なのだと知った。

外側に別のルールがあるのは知っているけど、俺は俺のルールで生きてるんだから関係ないよ。

彼は言動でそれを出しているものであり、見向きもされない少数派にありながら、ただひたすらに自由だった。

高校になっても、彼の自由さは変わらない。

美術部に入ってくるとばかり思っていた私は、高校生になっても彼を観察できると踏んでいたのだが、彼はそこ節子さんと遊ぶのに夢中になっていた。

節子さんとは学校七不思議のひとつで、幻の女子生徒のこと。猫田さんと同じく、存在しないものを、彼はまた追いかけていた。

「昨日せつちゃんは楽しそうに笑ってたよ。ほら、ミサイルがさ、俺の手製なんだけど、全部吹っ飛んじゃって。子供なんだけど、すげえ頭いいんだ。せつちゃん」

どうやら彼は、節子さんとも何度も会っていたらしい。

「すごいね」

私が言うと彼は、

「いや、なんでもないんだよ。すぐそこに、せつちゃんはいんだからさ」

と言っていた。

節子さんは女子生徒の片思いの寂しさから生まれたものだという噂があり、その意味では彼の言うことは当たっているのかもしれないなかつた。

なぜならば私は、彼に酷く惹かれていたのだから。

だけど、私の思いは、愛だとか恋だというようなものではなかったと、今の私は知っている。

高校三年生の秋の日。

私は自転車に乗っている彼にあつた。大きな荷物をくくりつけた、ロードバイクと呼ばれる自転車に乗った彼に。

「それ、どうしたの？」

「あ、俺旅に出るんだ。東京まで自転車でさ」

彼はいつものように、ニコニコと笑って言った。節子さんの次は、自転車旅行に夢中のようなのだ。

「絵を描きながらいろんなところ行って、東京に着いたら絵描きになるのかなって」

彼はスケッチブックを取り出し、ぱらぱらとめくる。美麗な水彩画の、様々な場所で過ごすグレーの虎猫の姿が、そこには描かれていた。

赤い屋根の上で眠っている姿。

コンクリートの壁の下を優雅に歩く姿。

それらは全て、中学校時代から彼が言葉の端々に乗せていた猫田さんだった。

私は彼が絵を描き続けていることが、少し嬉しかった。そのころ彼の絵は、既に私の画力を超えていた。

「まだ猫田さん描いてるんだ」

「お、知ってたんだ、猫田さん」

「うん、中学生のころ言ってたでしょ？」

「そうだな。うん、猫田さんも描いてるよ」

彼はスケッチブックをめくり、今度は濃紺の髪を持つ少女の絵を私に見せてくれた。無邪気に笑うその少女は節子さんだろう。

「猫田さんはもう会わなくなっちゃってさ。久しぶりに会いたいけど、猫田さんきつと忙しいんだろうな」

彼の頭の中では、猫田さんは今でも世界を旅しているのだろう。今頃猫田さんは、どここの旅の空の下にいるのだろうか？

「学校はどうするの？」

「あ、俺留年だから。だからもう、こっから先は意味がないんだ。四月から、またもう一年」

「そうなんだ」

「それまでには戻ってくるよ。せつちゃんが寂しがるからさ。今見えるやつら、みんな三年だから。俺がもどらないと知らないやつらだけになっちゃう」

「戻ってくるのに、東京に行くの？」

「そう。東京で絵描きになる。絵描きになったら帰ってくる」

彼には彼のルールがあるのだろう。

私達には分からないルールがあるのだろう。

自転車で東京まで、絵を描きながら行かなければならなかったのだろう。

彼が戻ってくる前に、私は卒業してしまった。だからその後の彼のことは、私は知らない。

一度、彼のルールのことを聞いておけばよかったと、私は思った。

彼はその後節子さんと遊んだだろうか。

猫田さんと会っただろうか。

絵描きにはなったのだろうか。

彼は自由だった。

この狭い世界の中で、多数派に飲み込まれている彼は、だけれどごく自由だった。

私は多分、彼の自由なところに憧れるのだ。
だから彼のことがかんなにも気になるのだ。

愛や恋といった感情ではなく、生き方に憧れを抱いていたのだ。

私も自由でありたいと思う。

彼のような自由を探すのは私には難しいだろうが、私も自由でありたいと思う。

自分のルールを見つけて、私なりの自由を。

いつの日か……

私は彼に再び出会うこととなる。

猫を抱いた女性の絵。

濃紺の髪を持った少女が、グレーの虎猫を抱いて微笑む姿を描いた絵。

彼の代表作は猫田と節子。

いまや画壇の新星と呼ばれる彼のメインモチーフ。

その二つの意味を知る私は、彼の絵を見るたび、少し笑うのだった。

擬似戦争のカインドネス（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

擬似戦争のカインドネス

堀に囲まれた領内に帰ってきて、騎士は兜を剥ぎ取った。長い金髪を微風にたゆたわせる、切れ長の目を持った女騎士。体格こそ小柄であるが、剣の腕前や知略において、彼女の右に出るものは国内にはない。

堀の外ではやかましく、闘争が繰り広げられている。

剣の時代の闘争は、戦略と数量で決まるといつて過言ではなく、腕の立つ騎士たちは力をもてあましているのが現状だ。

「騎士団長。お早いお帰りですね」

堀から身を乗り出して闘争の行方を見守っていた一人の兵士が、女騎士を見て言った。そう、彼女はこの王国の騎士を統べる存在なのだ。

「用事が早く済んだ。それより、これはどういうことだ？今日は演習だけのはずだが」

「いやそれが、そうだったんですがね、これがまた」

「また兄上殿の気まぐれか」

女騎士はため息をついた。

繰り上げられる闘争は、騎士の勤めとはいえ、気まぐれで予定を覆されてはたまらない。

「でもいい調子ですよ。スコア見ますか？」

兵士は板に鋸で留められた紙を差し出した。縦列に一から五までの数字、横列には西と東の表記がある。一と三には東に○、西に×がついており、二は逆だ。つまり東の二勝一敗で、女騎士のいる東国はあと一勝で勝ちが確定する。

この戦争は、擬似戦争だ。

東国と西国の事細かな取り決めの中で行われる、偽者の戦争だ。

「気まぐれの戦で勝つても意味はないな。訓練にはなるが、それだけで国民はよろこばんよ」

苦笑して、女騎士は兵士にスコアを返した。

この擬似戦争では、勝った方の国の税金を次の戦争まで負けた国でまかなうことになっているのだが、突発で行われる戦争はその埒外だ。定期戦で勝たねば、得られるものはないのである。

「おかげで今日は、応援も身に入らないようですよ」

兵士も苦笑するが、それでもどこか楽しそうに戦況を見守っていた。

娯楽と化した戦争だが、それでも剣士の血が騒ぐのだろう。損得勘定とは別のところで、勝ち負けが気になってくるのだ。

「国民も、現金なものだな」

この闘争は魔術師の映像技術によって国民の目にも届けられる。

しかしながら、今日は上映所の客足が芳しくないようだった。

「騎士団長。一つ聞いてもよろしいですか？」

「なんだ？」

「この擬似戦争、なぜ騎士団長は賛同したのです？」

「ふむ……」

女騎士は、女だてらに剣の道を行き、頂点を極めた存在だ。そこらの男の騎士よりも、騎士のプライドや意地などといった事に敏感なのだが、見世物とされる擬似戦争を良しとしていた。

確かに、見世物とされることを、女騎士はあまり好んではない。

だが、そこには別の感情が介在するのだ。

東国と西国に分かれるこの二つの国は、元々は一つの国だった。それを幼い兄弟が国を継いだときに、便宜上二つの国に分かれたのである。

戦乱の世の中、国を堅牢な城壁で囲んだのだが、東と西の都市部以外の森林地帯を囲むには時間も労力も足らず、国は二つに分かれることになったのである。

そして西を兄弟の兄が、東を弟が国王として治め、今に至るのだ。

他国の戦乱に怯えていた国民は、堅牢な城壁に安心感を与えられ、また兵力の研鑽に繋がる擬似戦争を見ることで、国民達は国の強さも知るのだ。

おかげで、二つの国は豊かである。

それがあるから、女騎士はこの「見世物戦争」を嫌うことが出来ない。

そしてもう一つ……。

「この戦争、怪我人を出さないことが大前提だと知っているか？」

「はあ……？ いや、でも、怪我人くらいは出ますよ。いくら擬似戦争と言っても、そりゃ戦いなんですから……」

「そうだ。でも、あのご兄弟はそれをいやだとおっしゃった。怪我をしないよう、死人が出ないよう、尽力すると」

擬似戦争をすると決めた議会に、女騎士は参加していた。参加といても口を挟む立場にはなく、国王の警護に当たったのであるが、ともかくその場にいた。

議会で兄弟は、擬似戦争を唐突に提言した。

それは互いの国の兵力を使った、大仰な戦争ごっこだった。

まるで子供の遊びのごとく戦争を提言した彼らは、取り囲んだ大人たちに失笑された。

国王であるがさすが子供だと、妙なことを言い出すと笑われた。

そもそも、国を二つに割ることさえ、二人は笑われたのだ。

堅牢な壁による国民への防備であるなどは露知らず、大人たちは「子供は馬鹿だから利権争いで揉めた拳句に国を二つに割ったのだ」と、笑ったのだ。

その壁のおかげで安寧を享受しているはずの大人たちは、擬似戦争の提言に、また「浅はかだ」と、子供達を笑った。

確かに浅はかだったかもしれない。

戦争ごっこに国が夢中になれば、誰も外から怖い人が来ることに怯えないですみますよね。

それに騎士さんたちも、訓練になると思っんです。

はにかむように二人の王は笑って言った。

ふたりは国民に暗い影が落ちて知っているのを知っていた。壁の中の安全が、この先ずっと保証されたものではないという不安があることを感じ取っていた。

それを解消する方法は、みんなで遊べばいいのである。

兄弟は、子供だからこそそれを知っていた。

浅はかだからこそ簡単にそれを言っただけだ。

女騎士はあれこれと説明する兄弟の言葉に耳を傾け、馬鹿なのは大人たちのほうだと思っていた。

大人たちは金のや利権のことばかり口にしていて、安全や安心を訴える国王達をあざ笑っているのである。

女騎士は、偉ぶって説教する大人たちを、馬鹿だと思っていた。

国王二人は、女騎士に意見を求めた。

怪我人は出ないようにします。それに、多分見世物になります。嫌だとは思っけど、お願いできませんか？

警護責任者としてその場にいた彼女は、自分に声がかかったことに驚いた。物言わぬ柱の一つとして数えられていたと思っていたから、すごく驚いた。

真摯な視線に射抜かれて、彼女は言ったのだ「やってみましょう」と。

かくして擬似戦争は始まり、今や熱狂する国民達のなかに恐怖は存在しない。

愚かだと笑っていた、会議に参加した大人たちも、今では夢中になっているほどだ。

怪我人は細心の注意を払ってもそれでも出てしまっが、そのたびに王たちは怪我人のもとに謝罪に来る。もとより無茶な約束に、涙を流して謝罪に来る。

国王達は、優しいのだった。

「あれほどの優しさを持ったお二人に、私は逆らえん。つまりそういうことだ」

だから女騎士は誓っていた。

優しい二人の国王に、二人の子供に、ずっとついていこうと。

今や戦乱は遠くない。

堅牢な壁のすぐ向こうに、戦争の火種がくすぶっているのだ。

異世界に行った魔術師のスカウトには失敗したが、彼女は代わりに探そうと決めた。仕えるべき国王は「違う人だと嫌です」と言ったが、とりあえずの代役を立てると決めた。

二人の王のどちらかに、世界を制してもらいたい。

そう決めたから、女騎士はとりあえず二つの国を守るだけの魔術師を探そうと決めていた。

「知ってますか？世界全部に術力を届かせる魔術師がいるんです！」
「その人に助けてもらえば、誰の血も流れずに済みますよ！」

勢い込んで話す二人を、女騎士は思い出す。

子供の夢を守る、私は母親なのかもしれないと、女騎士は密やかに思い……。

夢の間際のストレンジジャーニー（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思います。

夢の間際のストレンジジャーニー

辺りは全部真っ白だ。

ぐるりと視線をめぐらせても、目に見えるものはすべて白だった。少年のような、少女のような中性的な顔立ちの人間が、きよろきよろと視線をばら撒きながら、白の世界を歩いている。

頭の後ろで左右に二つくくられた、小さなおさが小さく揺れる。白い上着に、紺のスカート。

女性かというと、そうではない。

男性かというと、そうではない。

呼称することができるとすれば、その人は旅人。

それ以上でも以下でもないのだ。

「おや、珍しいお客さんがいらっしやいましたな」

落ち着き払った声が届いて、旅人は声のほうを向いた。視界に入るものは、何もない。

「こつちですよ、こつち。あなたの足元です」

言われて旅人が視線を落とすと、

「ご苦労をかけますな、恐縮です」

グレーの虎猫が、ぺこりと頭を下げるのが見えた。

「……どちら様でしょうか？」

「猫田と申します。あなた様も、どちら様でいらっしやいますかな？どこからいらっしやった？」

笑ったような顔の猫が、旅人を見上げてくる。

どこからと言われても、旅人にはわからなかった。

気がつけばここに居て、どこかにいかなくてもならないけれど、どこに行くかのヒントがない。

あるのは手の中の、小さなコンパスだけ……。

「ははあなるほど。旅をしてらっしゃる」

旅人はこれまでの経緯を猫田に話した。

旅人は、旅をするから旅人だ。

旅人にはルールがある。

一揃いの装備を持って、目的地に進み、辿り着かなければならぬというルールがある。

投げ出すこと適わないそれは、旅人にとっては一つであり全てだ。

ルールに則って目的地に到達し、そして再び新たなルールを貰い、また旅に出る。

だから旅人はずっと旅人であり、いずれその域を越えるときまで、旅人は旅人だ。

今回目を覚ました時、装備の一切がなく、旅人はただポツリと真っ白な世界に放り出されていた。片手に収まったコンパスだけが、どうやら今回の道具らしかった。

コンパスを手がかりに、旅人は目的地を目指す。

旅が何度目か、これはもう思い出せないほどだ。いつまで続くの

か、いつになれば終わるのか、旅人にはわからない。
だけど、投げ出すことはしない。

投げ出してはならないと、ルールは言っているし、旅人自身もしてはならないと思っているから、旅人は投げ出さない。

そして、なぜか分かる。

いつか旅が終わった時、旅人は名を名乗る権利と、一つの存在を与えられるのだと。

自分の生まれるその日までの旅なのだこれは。

「すると私も、あなたの道具になのかもしれないなあ」

真っ白な世界で、二人は歩を進める。

「ここってどこなんでしょう？」

「夢の中ですか、人の」

「夢？誰のです？」

「それは一介の卑しい猫にはわかりません。ただ人の夢。そうしか言えませんよ」

「真っ白ですね」

「真っ白ですか。夢の持ち主は、余程想像力が欠如していると思われませんか」

ほっほっほと、猫田は笑った。およそ猫らしからぬ笑いかただった。

「猫田さんは、なぜここに？」

「居心地がよろしいですよ、人の夢は。自由気ままでいられますからな。猫は自由が好きなものです。だから、体を置いて人の夢に忍び込んでしまいましたよ」

「はあ……」

「お嬢様は、旅をする理由をご存じないのですか？」

「あれ？女の子なんですか？」

「高等学校の女子生徒のお召し物を着てらっしゃいますが……」

猫田は視線を上げて、下ろす。紺のスカートのセーラー服に、髪型だつて女の子のように結つてある。

「いや、実はわかんなくて……。女の子だったのかあ」

「ふむ。でももしかしたら、まだ決まっていなくてもいいかもしれませんぞ。お足元を御覧なさい」

旅人が視線をおろすと、

「あ、気付かなかつた……」

男性用のスニーカーを履いている足元が目に入った。

「これは男の子用？」

「まず間違いありません」

「……スカートってスースーする」

「ほっほっほ。それもまた、まだ決まっていない証拠でありましよう。女性はスカートを穿いて、違和感を感じないでしょう」

「そうですか？」

「慣れていきますからな」

「はあ……」

真っ白な世界。

行けども行けども、真っ白な世界。

二つだけの彩りは、ゆっくりゆっくりと先を進む。

「どちらに向かつているのでしょうか？」

「どこでしょうねえ」

「コンパスをお持ちなのでしょう？示した方向に向かつているのはなかったのです？」

「いやそれが、これ壊れてるんです」

「拝見できますかな？」

旅人はコンパスを猫田に見せた。手の中に納まったコンパスは、針をグルグルと回転させ、針はどこにも止まらない。

「ふむ……」

猫田は少し考え、

「壊れているのではありませんよ、見方が違うのです。こちらのようですね」

くるりと方角を変えて歩き出す。

「分かるんですか？」

旅人はあわてて猫田に付き従った。

「どうやら、今日の私は本当にあなたのための道具のようです。あなたに読めないコンパスが、あなたのために私には読める」

「すいません、道具にしちゃって」

「構いませんよ。あなたが決めたものではありませんし、これはこれで楽しいものです。長い間人の夢の中におりますが、初めてのことですからな」

「こんなことって、なかった？」

「ええ。真つ白な世界の中に、夢の当事者でない人と二人きりになることなど、今の今まで」

「初めてかー。お赤飯ですね」

「ほっほ。変なことばかり知ってらっしゃる」

「変なんですか？」

「あなたが貴女なら、変わったことでもありませんが」

猫田と旅人は並んで歩く。

白い世界で並んで歩く。

コンパスを読み解き、指針を手に入れ、一人と一匹は歩幅を合わせる。

「猫田さんは、ずっと人の夢に？」

「ええ。世界中渡り歩いております。目的地などありませんから気ままなのですが、終わる前に別の夢に渡らねばなりませんから、これで少し忙しい」

猫田は言って苦笑する。

猫らしくなく苦笑する。

人の言葉を操った、猫らしからぬ夢に住む猫。

自由気ままな、グレーの虎猫。

賢く謙虚な、グレーの虎猫。

真っ白な世界にぼつかりと、小さな穴が開いていた。覗き込めば何も見えない、小さな穴が開いていた。

「面白い。裏側から見て御覧なさい、何もないように見える」

「あ、ほんとだ。真っ白ですね、こっちからだ」と

猫田に言われて裏側に回ると、穴は欠片も見えなくなった。

白い世界に開いた穴。

コンパスの示した先は、小さな穴だった。

「ゴールですかね？」

「ゴールでしょうな」

「入ればいいんでしょうかね？」

「入ればいいんでしょうな」

「それとも出るんでしょうか？」

「出るのかもしれませんが」

真っ白な世界の、小さな穴の前に二人は立つ。

四角く開いた、穴の前に立つ。

裏側から穴を覗けば、四角く縁取られた一人と一匹は、まるで一幅の絵画のように見えるだろう。

だけれど裏に回れば穴はなく、ただ白い世界にたつ二人が見えるだけだ。

それは夢というものの、儚さを表している様にも思えた。

「お行きなさい」

ひげを揺らして猫田が見上げた。

「猫田さんは残るんですか？」

おさげを揺らして旅人は見下ろした。

「残るも何も、行けません。人の夢の居心地がよすぎて、長居しすぎました。体はもうないのです」

「そうですか……」

「あなたは旅をお続けなさい。私は別の夢に渡りましょう」

「案内してくれて、助かりました。ありがとうございます」

「こちらこそ、とても楽しかったですよ。ありがとうございます」

一人と一匹は笑顔を交し合い、やがて一人は穴の中へと踏み入れた。

猫田の見守るすぐ目の前で、旅人の後姿がゆらめいて消える。

ぼつりと一匹、白い世界に残された。

「続きのあるのはしかし、うらやましいですな」

ぼつりと呟き、猫田はゆっくりきびすを返す。

夢の世界の住人は、生を失って幾星霜。

自由気ままな身にしてしかし、限りある命がうらやましくもあり……。

続きを歩んで旅人は、いつしか生を受けたその日、人の言葉を操った猫のことを思い出すだろうか？

賢く謙虚なその猫は、自由気ままで、少し寂しい。

五回限りのプレイボール（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

五回限りのプレイボール

不思議な夢を見た。

女の子と猫が真っ白な世界を散歩してるだけという、非常極まらない夢を見た。

女の子はすごく可愛かった。その所は大変満足なのだが、一緒に歩いている猫にはとてもむかついた。

夢の世界が真っ白なのは、想像力が欠如してるからなんだとよ。

ああそうかいと、俺は眠りながら思ったさ。

まさか猫にまで馬鹿にされるとは、俺は思っていなかった。

大体、俺の夢なのに、俺は一体全体どこに居たんだ？

ずうっと真っ白な世界を女の子と猫が歩いてるだけ。

猫に言われたからじゃないけど、本当に俺は想像力つてのが欠けているんじゃないかと思う。もっとなにかしら、小道具があったっていいじゃないか。夢に文句をつけるのもアレだが、あんまりにもあんまりな夢だった。

「お前は大体考えがなさすぎる」

担任教師はそう言っていた。進路指導室で向かい合って、三十過ぎていまだ独身の、とんがったメガネの女教師はそう言っていた。

そりゃそうかもしれないと、俺は思う。

超が付くほどの、俺たちは弱小で……。

この三年間、スコアボードを五回から先に進めたことがない。

白球は幾度となく外野スタンドに放り込まれ、ワールド負けをしなかったことがないくらい、俺たちは弱小野球部だ。

それでもみんな真面目に、一生懸命に練習を重ねてきた。

この三年間勝ちを収めたことなく、俺たち三年生は夏の大会

で引退を迎える。本当のところ、勝ちが付かなかったのは三年どころでなく、十年にも及ぶそうだけど、詳しい記録は調べてないから本当はもったかもしれない。

一年の頃からエースで投げてた俺は、被本塁打の記録を争えば、きつと高校野球史上でも五指に入るだろう。

そもそも俺が一年生エースだったのだって、俺が上手かったからでなく、上級生がそろってヘタクソだったからだ。投げられなくはないというレベルだった俺がマウンドに上がるはめになるくらい、ウチは弱いのだ。

仕方ないと思う。

この学校は新学校で、運動部なんてものは、試験勉強のストレス解消のためにあると言っても過言ではないのだ。だから、弱小すぎても仕方ないと思う。

それでも俺は野球部が好きだ。

下手の横好きといわれても、この野球部が大好きだ。

進路希望表に野球選手と書いたのは、ちょっとした意思表示みたいなものだ。

担任教師のトンがりメガネは考えがないと言った。

夢の中の喋る猫は想像力が欠如していると言った。

そういわれても仕方ないと思う。

万年一回戦負けの弱小校のエースが、野球選手になるというのだから、馬鹿にされても仕方ないと思う。

実際のところ、自分の身の丈くらい、自分が一番知っている。

何も俺は「プロ野球選手」になると言ってるわけじゃないのだ。俺は「草野球選手」になりたいのだ。

当たり前だけど、そんな職業はない。金の稼げない肩書きだ。だけど俺は、草野球選手になりたいのだ。

もちろんちゃんと働くのだろう。

もしかしたら大学にいくのかもしれない。

だけど俺はメインの肩書きを草野球選手にしたいと、そう思っている。

三年間絆を深めあったメンバーで、草野球チームを結成することが既に決まっている。「俺たちヘタクソだけど、一生野球人だよな」と、肩を抱き合って決めたのだ。

これでもガキの頃から、プロを目指していた野球人だ。実力は伴わなかったけど、気持ちだけは持っていた野球選手だ。

プロ選手は雲上人。

それを知ってなお、俺たちは野球人として生きる。

決意表明の進路希望だ。

できるヤツじゃないと、やつちやだめだと誰が決めたんだよ。好きなだけでやりたいヤツだって、たくさんいるんだ。

俺たちみたいなのやっだっているんだ。

打倒甲子園と書いた紙つぺらを、俺は部室の壁に貼り付けた。
目指せじゃないのかって？

いいんだ、打倒であってるんだ。

甲子園をぶっ飛ばせるくらいに、俺たちは俺たちで、自分勝手な野球をやる。

馬鹿みたいに楽しい野球をやる。

想像力が欠如してたって、考えが足りなくなたっていい。

好きなことをやるために、もしかして人生棒に振るかもしれない。

それでいいと俺は思う。

草野球をやるために、生きていたっていいじゃないかと、俺は思う。

白球を投げる権利は誰にでもある。

五回限りのコールド野球の中で俺たちは、笑ってなかったことなどない。

楽しむだけなら、誰にだって負けないよ。

空想世界のロールシャッハ（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

空想世界のロールシャツハ

小さい頃によく見ていた夢がある。どこか欧風な庭園の芝生の上に座っているあたしを、白馬の王子様が迎えに来るといふ夢だ。

白馬の王子様の優しいキスで、あたしはいつも目が覚めた。

ぼんやりとあたしはそのことを思い出し……

「あーもう、なんだこりゃ。飢えてんのかあたしは……」

赤くした顔をぶんぶん振り回し、取り付いた妄想を振り払うのだ。最近よく、王子様の夢のことを思い出す。

ただけな乙女をやってんだろうと、自分のことを恥ずかしく思う。

あたしはもういい大人で、三十代の半ばに差し掛かった年齢で……

…。

男に縁のない生活をしているもんだから、夢見がちになったりするんだろうか？

毅然とした態度で校内を闊歩するあたしは、生徒達にこっそりと（しかしばつちりと）恐れられていて、生徒は誰も寄ってこない。

保険医なんかはただ笑ってるだけなのに人気者で、生徒を思っで厳しく指導するあたしはとんでもなく不人気なだから、世の中不公平である。

まあ、ガキどもには興味はないから別にいいけど。

そんなあたしはただいま迷子の真っ最中で、一体全体なんでこんなところにいるのかわからない。

おかしい。

最寄り駅からてくてく歩いて20分。いつもならば勤務先の学校

にもう着いているはずなのに、目の前に広がった世界はサイケデリックで……。

「おや？これはまた、変わったアリスが来なすった。随分とうがたっている」

芝生にレンガ道。作り物の木がぶつ刺さり、塗ったくったような原色の青の空に、プラスチックの雲が流れていく。異様な世界の中、不意に声が聞こえた。

……なんだと？とうがたってる？

「おかしな格好をしてるね全く」

ひょいと現れた動物面のシルクハットの小男が、あたしを上下まで見えていった。とんがったメガネにグレイのスーツ。なにがおかしいんだ。

それよりなんだって？とうがたってる？

「あんたなんて言う……」

「色が悪いね、こいつにしよう」

ぽんと男が手を叩くと、着衣が真っ白なドレスに変化した。なんじゃこりゃ？

「ちよつと、なにをして……」

「足元もよくないよ、徹底的に似合わない」

男は次いで、杖でスニーカーをちよんとつついた。スーツに似合うように苦心して選んだスニーカーは、ぱっと白いヒールに変わる。何を勝手に！

「やめなさい。あんた一体……」

「メガネはダメだ。キツく見えるよ」

男はあたしからさつとメガネを取って、まるで紙くずのように丸め、ぽいと放る。

「ふうむ、これでだいぶマシになった」

満足げに猫みたいに飛び出したひげを撫で、男は言う。

あたしはあつという間に、不思議の国に迷い込んだアリスみたいになってしまった。

「あんたね、何するのよ一体！」

燕尾服を着込んだ男の首根っこを捕まえ、あたしは持ち上げる。成人男性の半分くらいのおおきさの男は、軽々と持ち上げられてしまう。なんだこいつは。帽子屋か？

「ここはどこ？ スーツを返しなさいよ。メガネがないと見えないの！」

ここぞとばかりにあたしは言いたいことを言う。言わせてもらえなかったものだから、一段と力が入るものだ。

「ここはあんたの世界だ。スーツならクロゼット行きだよ。メガネがなくても見えてるはずだ。そんなことより急がないといけないぜ？」

帽子屋はずれ落ちかけたシルクハットを正しい位置に修正し、懷から懷中時計を取り出した。帽子屋じゃなくて白ウサギだったか？

「何よ」

あたしは白ウサギの示した時計を見る。

なんともぎつくばらんな時計だ。なんと言っても表示が0しかなく、じわじわと針が中心からぐるりと回り、0を指しているだけだ。

白ウサギの言うとおり、メガネがないのによく見えた。裸眼の視力は0・1もないはずなのだが。

「あんたの世界が終わるまでの時間だ。これが終わっちゃうと、ちよつと事だぜ。急いでゴールを見つけなよ」

白ウサギが時計を差し出したので、あたしは時計を受け取り、代わりに白ウサギを放り出す。

……あたしの世界？

このサイケな世界があたしの世界？

夢に違いないのだろうけど、夢とは深層意識の現われたとかで……あたしはこんなとち狂ったような女だったのか？

「心当たりはないのか？ あんたはいいか？ 脱出しなきゃならんのだ

よ

放り出された白ウサギは言った。

「ゴールったって……」

と、あたしは考えかけて思い至った。

顔が一気に赤くなるのがわかる。

しまった、あたしはこの世界をよく知っている。

なるほど、これはどうしようもなく、あたしの世界だ……。

小さい頃によく見ていた夢。

どこか欧風の庭園に座ったあたしを、迎えに来る王子様。

優しくキスして、目が覚めるベッドの上。

子供の頃のあたしは絶対にどうかしてた。

欧風？幼稚園児の落書き並じゃないか。

この真っ白なドレスだって、ああ、夢で見ていたとおりだ……。

背後に小さな東屋があり、夢とそっくり同じ位置取りにあたしは座る。

あの頃のように、お花の冠を作らなきゃならないだろうか？

ああ、なんとも恥ずかしい……。

目覚まし時計でも鳴り響けば、この世界から抜け出せるんじゃないだろうか？

なにも言われたとおりになくても……。

白ウサギのヤツ、遠くでニヤニヤ笑ってるに違いない。

かばかぼと音を鳴らし、王子様が白馬に乗って現れて……。

あーもう！

「お、目が覚めましたね。よかった。ご家族を呼びましょう」

白い世界で目が覚めた。

白いベッド。白い壁。白い天井。

白衣の……王子様。

王子様！？

「記憶にないでしょうね。あなた事故に遭ったんですよ」

優しい笑顔のお医者様は、あの世界の王子様とぴったり同じ顔で……。

それから世界の続きがどうなったかって？

何で言わなきゃならないのよ。

ま、夢でお預けくらったキスは、ちゃんとしたからね。報告までに。

白いドレスに包まれて、あたしはぽおんとブーケを放る。

偽りだらけのトレードワールド（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

偽りだらけのトレードワールド

赤信号をかつ飛ばした。

平日早朝の町の中、人通りはないはずだった。

急ブレーキを踏むが、間に合わず、振動が伝わってくる。

車を降りて、バンパー部分を確認する。

「チッ」

苦々しく、はき捨てる。

車に傷が付いてしまっていた。

俺は倒れて動かないスーツ姿の女を見下ろした。

近くの高校の女教師か？朝っぱらからだらだと歩きやがって。

おかげで車を捨てなきゃならなくなった。

赤いスポーツカー。最新モデルで、そこそこ気に入ってた車。

事故ったせいで辺りがざわついてきた。

腹癒せに女を蹴飛ばし、仕方ねえかと、俺は交換する。

ぐるり。

馬鹿でかい冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、ボトルに直接口をつける。酷く渴いてた喉が、瞬間に潤された。高級ミネラルウォーターらしいが、水は水だ。ひねった蛇口から出てくると、大差はない。

「チッ」

舌打ちをして、俺は赤く染まったシャツを脱ぎ捨てる。

ミネラルウォーターの次は、シャツも拝借するでしょう。

どうせこの家の主は、水も服ももう必要がない。

それにしたってまさか鉢合わせになるとは思わなかった。

平日だったと思ったが、まさかこっちでは祝日だったか？それとも

金持ちだからもう仕事はしてないのか？

こんな早朝に、家にいるとはな。

背後には血溜まりのなかに人の死体。俺の死体。

まあ、こうなってしまうたからには仕方ない。代わりを探す為、俺は交換する。

ぐるり。

財布の中身を確認する。五千円札が一枚と、千円札が三枚。あとは小銭が数枚。夢から覚めたように押し寄せてくる記憶をたどると、貯金もろくにない。

スーツ姿で外に放り出されて、外回り仕事らしいが、面倒くさいもんだ。

俺には合わない。

こいつは外れだ。

財布の中から紙幣だけを抜き取って、俺はまた交換する。

ぐるり。

ぐるりぐるりと、世界は転じていく。

知ってるか？世界ってのは、一つじゃない。いくつもいくつも、たくさんの世界が同時に進行しているのだ。

その中の一つの世界で、人間は生きているのだ。

並行世界といわれるよその世界に気がつくことなく生きているのだ。

通常はな。

だが俺は違う。

俺は平行世界に移動できる。

俺のいる世界に限るといって、限定条件付だが、俺は世界を移動できる。

並行世界の俺と俺自身を交換するか、並行世界の俺の家に跳べるという、超常の力だ。

幾百幾千の並行世界。

そのどの世界にも、俺はいける。

俺同士の交換をそのまま交換、並行世界の俺の家に跳ぶ事を跳躍と呼び、俺は力を使って生きてきた。

並行世界の俺たちはマヌケで、ただ日々の仕事をこなして生きてきているだけだ。

真面目でつまらなく、昔の俺を見ているようだった。

しかし俺は、並行世界に成功している俺がいることを知った。

時々ヤツから金を拝借して、俺は好き勝手に生きてきた。

好き勝手やりすぎて法に触れたこともあるが、そういうときは交換すればいい。交換して別の世界に行ってしまうえば、交換された俺が代わりに罪を償ってくれ、俺は移動した先でのうのうと生きられるのだ。

移動してしまえば、そっちの世界の俺の記憶は勝手にやってくるので、生活には困らない。交換された俺はやはり記憶がはずれやっできて「やばい、人を轢いてしまった」と思うのだろう。

金を搾取されても、無実の罪で投獄されても、俺のためなんだから、俺は許す。

そついうもんだらう？

全部俺なのだから、俺を俺の好きなようにして何が悪いというんだ。

ぐるり。

俺は交換をした。

財布の中を覗けば、こいつも外れだ。金がろくに入っていない。まあ、まだ行っていない世界はある。いずれは当たりを引くだろうから、気にしないでおく。

それに、記憶がやってきてみれば、貯蓄がかなりあるかもしれない。最終決定は先送りにして、俺は馴染みの店に行くことにした。

店主は無愛想だが美味しい珈琲を出す店で、大体どの世界でも大体同じ店主が珈琲を出している。交換した先でこの店がなかったら、おそらく再び交換するだろうというほどの、俺のお気に入りの店だ。

路地裏に入り足を進めると、その店はきちんと大体同じたたずまいで存在していた。

俺は口の端に笑みを浮かべ……

僕は尻餅をついて、ブリッジみたいな格好で手足を動かして後ずさった。

手がわなわなと震える。

ついに、ついにやってしまった。

頭から血を流して、倒れこんだ僕が緩慢な動作で僕を振り返った。

「う、うぐぐ……」

流血で染まった僕が、うめきながら僕を見つめてくる。

しかしそれも束の間。

もう一人の僕は、動かなくなった。

死んだ。

裏路地の、流行らない店の前でよかった。
目撃者なんて、誰もいない。

僕が僕を殺したなんて、誰も見ていない。

手がわなわなと震える。

ゴルフのドライバーで頭をぶん殴るって感触は、ただ硬いものを殴っただけのようで、それでいてすごく気持ちが悪かった。

こいつは殺されて当然の僕だ！

三人の僕を殺してるんだから、当然だ！

同じ僕だからずっと見逃してきたっていうのに、やりすぎたんだ
こいつは。

ほんとうはきつと、こうなる前に手を打たなければならなかった
んだろう。

もしかしてこいつも、知っていれば危険因子になることがなかった
たのかもしれない。

僕達が全員、記憶を共有していることを知っていれば……。

そうすれば乱暴狼藉を働くこともなく、排除するべきだとの決断
もなかったはずだ。

他の俺は能力を知らない？

知らなかったのは、お前のほうだ。

未知探求の暴走機関（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

未知探求の暴走機関

「アレは絶対ドッペルゲンガーなの！絶対そうよ！」

とある公立高校の教室の一つ。

だん！と机に両手をつけて、小柄な少女が声を上げた。頭の両端をリボンでくくった、ツインテールの栗色の髪が勢いに任せて揺れる。

短めのおさがが、左右にゆらゆら。

小学生みたいな彼女は、れっきとした女子高生だ。

見下ろされた机の持ち主は、頬杖をついて「またか」と思う。

「何を見たのよ」

半ばあきれながら、分厚いメガネをくいと持ち上げ、図書委員会に属する彼女は答える。

「おんなじ顔をした男の人を二人！ドッペルゲンガーなの！絶対！」

「あのね、あみちー。それって双子なんじゃないかしら」

「ゆりちーそれが違うの！ほらこれ見て！」

幼女子高生あみちーは、ばささと大げさに音を鳴らして証拠物件をゆりちーに見せ付ける。

「……新聞持つてきたの？」

本日付の朝刊の社会面。えへんと胸を張って、あみちーは見せ付ける。

全くこの子は、とゆりちーはあきれ果てた。

幼いころからの付き合いで、あみちーがこういつた暴走行為に及ぶことにはなれているが、だけれど話を聞くたびにため息が出る。

「ほらこれ！」

あみちーが指を指した先には一件の死亡記事。殺人事件らしく、そして犯人は捕まっていないようだ。

「この人を見たの？」

「そう！それも二人！」

新聞を畳んで、Vサイン。まるで勝利のVサイン。

「ドッペルゲンガーって、自分を殺しに来るんでしょ？何よりの証拠じゃない！」

「あー、つまり同じ顔した人を二人見て、内一人が殺されて亡くなったから、双子じゃなくてドッペルゲンガーだと？」

「そう！動かぬ証拠でしょ？」

ゆりちーは内心で、再びため息をついた。

あみちーは不思議なことが大好きで、常に超常現象を追いかけている。勢い余って「学園不思議探求部」なるヘンテコな部活動を始めてしまうほどで、他人にとって些細なことでも彼女にかかればミステリーになるのだ。

ゆりちーは思う。きっと今回もまた、彼女の思い込みなのだろうと。

「偶然じゃないかしら。そもそも見間違いかもしれないし。本当にこの人だった？本当に同じ顔をしてた？」

「……一人はフードかぶってたし、自信ない」

「ほらみなさい。別人よ、別人。この人も偶然似てるだけ」

ゆりちーはあみちーが持ってきた新聞を持ち上げ、ぱさぱさと揺らす。

「なあんだ。残念……」

しょんぼりと、あみちーは教室を出て行った。二人はクラスも学年も違う。あみちーのほうが、実は一つお姉さんだ。

「ちよつと、新聞！」

ゆりちーは置き去りにされた朝刊をぶんぶん振り回すが、しょんぼりモードのあみちーには届かなかった。

「まったくもう」

ゆりちーは新聞を、とりあえず机の中にしまっておくことにした。

不思議なこと。

それはあみちーにとって、生きることから切り離せないことだ。幼少のころの記憶がつきまとして、小さなことでも忘れられないことが、誰でもあると思う。

それが彼女に不思議を追いかけさせるのだ。

幼いころ。

彼女は幽霊に命を救われたことがある。

十年ほども昔だろうか。

気がついた時には見知らぬ場所に迷い込んでいて、どこに行っても見知った場所に行き着かず、途方に暮れていた時のこと。

彼女は出会った。

現実離れた容姿の、魔法少女のような女の子に。

彼女はその少女に助けられ、そしてふと気がつくと自室にいたのだ。

しかしそこに魔法少女はおらず、居たのは一緒に本を読んでいた幼馴染の女の子で。

「あみちーどこに行ってたの？」

女の子はそう言った。

だからあれは現実だ。

迷子になったあみちーを助けた幽霊。

ゆりちーが目撃者だ。

だから彼女は不思議を追いかける。

「ね！ね！これどう思う？」

授業の最中だというのに超常現象を扱った雑誌をめくり、そのなかのUFO目撃記事を隣席の女子生徒に見せるあみちー。

「あんたね……。そろそろチョークが飛んでくるよ？」

あみちーの暴走に悩まされているのは、ゆりちーだけではないようだった。

だからあたしは手を打つことにした。

正直言って、あみちーが暴走するきっかけを作ったあたしとしては、彼女に一刻も早く立ち直ってもらいたいのだ。

「どこ行ってたの？」

何である時、あたしはあんなことを言ったのか……。

あの時、あみちーは迷子になったんじゃない。

あみちーは本の中に入ってしまったのだ。

あたしの家系は代々本の中に入れたので、あたしは本の中に入り、あみちーを助け出した。

あみちーの言う幽霊は、だからあたしだ。

そのころから不良書籍調整者の面倒くささを知っていたあたしは、あみちーにそんな面倒なことをさせたくなく、とっさに嘘が口をついたのだ。

それがこんなことになるなんて……。

だからあたしは手を打つことにしたのだ。

彼女が不思議を追い回すのは、あの時の体験が嘘でなかったことを確認する為だという。もう一度超常現象を目にして、不思議なことはあるのだと証明するためだという。

だから不思議を見せ付けるのだ。

「あなたって、見えない人に見えるようにすることかって、できるのかしら？」

「やったことねーけど、出来ると思うわよ。ほら、なんつーの？世界中のネットワークをぐうっと集中させるっつーかさ、そんな感じで」

「それならお願いできる？迷惑かけちゃうことになるんだけどさ」

「かまわねーわよ。おねーちゃんのためならね、なんでもしちゃうのよあたしは」

学園不思議探求部、その狭い部室には、デスク一つとパソコンが一台。たったそれだけしかない。

パソコンを操作する彼女は、小柄すぎて完全に物陰に隠れてしまっている。

「入るよ」

ゆりちーが開け放されたドアをコンコンとノックすると、あみちーがひょいとパソコンのモニタの脇から覗き込んだ。

「あー、委員会終わったの？」

「うん。あみちーはまだ何かあるの？」

「んー、もう特には。ていうかね、暇つぶししてただけなんだー」

「じゃ帰りましょ」

二人連れ立って、部屋をあとにする。

閑散とした廊下を歩く。

西日が傾いてはいるけど、部活をしている生徒が帰宅するにはまだ早い。だが文科系の部活動は部室が学校中に点在していて、学園不思議探求部の部室の周りには他の部はないため、辺りはすごく静かだ。

「部室の鍵返すから職員室寄るけどだいじょうぶ？」

「いつものことですよ。はやく行きましょ」

「はい」

年齢はあみちーの方が上だが、どちらかといえばゆりちーの方がお姉さんだ。

姉妹のようだと言われる二人だけど、かならず妹とされるのはあみちーで、あみちーはそのことをまるで疑問に思っていない。

「そういえばさ」

思い出したように、ゆりちーは話しだす。

「この辺、節子さんがよく出るらしいよ？」

「ホント？でも節子さんって、給水塔と図書室が定位置なんじゃないの？」

くりくりした瞳で、あみちーはゆりちーを見上げた。

ゆりちーは背の高いほうではないけれど、あみちーがゆりちーと目を合わせるには見上げなければならない。

「だからちようど、通り道なのよ」

ゆりちーは言った。

この学校は校舎が並列に三つ並んでいて、普段の授業を行う教室棟を真ん中に、実習室などの入った特別棟が東西に一つずつある。学園不思議探求部の部室は東側の棟で、図書室は西棟だ。

そして実は、今しがた通っている廊下を西棟に向けて突っ切ると、
実は図書室に行き着くのだ。

つまりここは図書室のちょうど対極にあるわけで……。

瞬間――

廊下の角から濃紺の長い髪を揺らした女生徒が現れ……

微笑んだ彼女は、廊下の窓にしみこむように消えていった。

ひやりとした空気が流れた。

時間が止まったかのように、呼吸を忘れたかのように、何もかも
が止まっている。

そんな一瞬の静寂。

「節子さんだ！」

静寂を突き破ったのは、あみちーの声。

あみちーの大きな目は、さらにさらに大きく見開かれていた。

「ねえ！見た！ねえ節子さん！」

ぐいぐいと、あみちーはゆりちーの袖を引っ張る。興奮の表れか、
ぐいぐいとゆりちーの袖を引っ張る。

「ほらもう！すごいすごい！」

体一杯に喜びを表すあみちーを

「もう、わかったから。痛いから話なさい」
ゆりちーは微笑ましく見守るのだった。

窓の外で節子さんが目配せしていることなんか、あみちーは気づかない。

あみちーにはもう見えない。

「やったやった！ほら！見たでしょ！」
大喜びのあみちーの頭に、ゆりちーはやさしく手を載せる。

ゆりちーは節子さんに軽く手を振り、すべてはこれで解決したと、胸をなでおろした。

なんて、馬鹿なことをあたしは思ってた。

ああもう、解決？なにがよ全く……。

甘かった。

あたしは甘かったのだ。

興味本位の人だかりの中で、あたしは頭痛の訪れを感じていた。

「……今度は何を始めたの？」
昨日までの学園不思議探求部は、ドアにべたりと張り紙をし、名前を学園恋愛相談部と改めていた。

あみちーが学校中に許可なくビラをばら撒いたのでこの人だかり

であり、あたしもそのおかげで知ることとなった。

「節子さんつてさ、ほら、片思いの女子の寂しさが原因なんでしょ？ほっといたらかわいそうだもん。成仏させてあげないとさ」

あみちーは部室内でいそいそと相談所の準備をしている。

新たな備品として、一人掛けのソファが二つとテーブルが加わっていた。どこから持ってきたんだか……。

「節子さんも喜ぶと思うんだよね」

あみちーはとても嬉しそうだ。

この子はもう、ひよつとしてただ単に、面白そうなことに首を突っ込みたいただけなんじゃないの？

もはやあきれ果てるしかないのだろうか？

「あー、ほんと、大喜びよ」

あみちーのすぐ側で節子さんはお腹を抱えて笑っている。本当に大喜びだ。

別の意味でだけど。

「あ、ゆりちーの入部届け出しといたからね」

「ちよつと！何を勝手に！」

甘かった。

あたしは甘かったのだ。

あみちーの暴走は、止まんないんだなー、きつと。

平穩時間のタイムリミット（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

平穩時間のタイムリミット

「ねえねえ、これってどう思う？」

隣席の女子が、ひょいと身を乗り出して雑誌を見せてくる。

衝撃！富士山頂にUFOが！

そんなもの見せられたって、どうしろって言うのよ。

彼女はオカルト好きなのかなんなのか、やたらそういう雑誌を買いあさり、いろんな人に真偽の判断を委ねている。とくにあたしは席がとなりなので、その被害たるや甚大だ。

大体今は、先生がカツカツと黒板に数式を書き連ねる授業中だ。

「あんたね、そろそろチョークが飛んでくるよ？」

そもそも世の中わからないことだらけだ。宇宙に地球が浮かんでるのだって、あたしには全く説明ができない。

そりゃUFOだって、飛びもするっつーの。

あたしの周りはどういう人間ばかりだから困る。

ちょっとおかしい人間が、やたらめったら集まってきたりするのだ。

図書室に住む魔法使いだとか、勝手に名前をつけたパソコンを幽霊に変えてしまった女の子とか、その美少女の（そのくせ子供みないな）幽霊とか、最年少不良書籍調整者とか。

どれをとつても、大多数の人間が一生をかけて一人も出会わないような、奇特な人間ばかりだ。

あたしは静かに過ごしたいのに、周りに変人が多いおかげで、とてもじゃないが気が気じゃない。

だってさ、それだけ変人を集めて、なにをたくらんでるんだって思っじゃない？

この学校、もしかして何かトンデモないことをやろうとしてるんじゃないかってさ。

国家一つ吹っ飛ばすくらいの力を、本当に持っているから困る。

ちらりと隣席のオカルト少女を見やる。

包み隠さずおおっぴらに、熱心にふんふんと、スポーツ新聞にも載らないようなヘンテコな記事を読んでいる。

この子はちょっとだけ、他の変人と違ってわからない所がある。

なにか意識の奥底のもつと奥で、自分も知らない何かを持っているような……。

まあいいやと、あたしは黒板に向き直る。

先生の板書は読まずとも、教科書を読めば勉強は大体わかる。

読めばなんとなく、教科書の言っていることが伝わってくるというものだ。

親の都合で転居を繰り返して、外国なんかにも何度も住んだあたしは、人や物を見る力を培った。おかげで大体なんでも、ちょっと見ればわかるのだ。

そんなあたしが言うのだ。

この学校、ヘンテコな人間ばかりじゃん！

何でみんな、あんなにおかしい人間達に気がつかないのか。

観察力がなくなたって、なんだかおかしいぞと、少しくらいは思っ
ていいだろうに。

親の職場が安定し、やっと一所に腰を据えられたのに……

大体行く先行く先で、あたしは変人によくであつた。

転居先でも必ず一人はおかしなのが居た。

今はマンションの隣に、二本の腕で空を飛ばうと頑張る男の子
ま
で居る。

映画で見たから人だつてはばたいて飛べるんだと、そう思ったの
だとか。

そんな幻想、信じられるのは幼い幼いころだけだ。

彼は来年には中学校に上がるはずで、夢幻がわからない年頃ではない。

見た目がとても幼いから、精神まで幼いままなのだろうか？

ともあれ、そんな人間ばかりが周りに居るのである。

いつもいつも、周りに居るのである。

ぼんやりと、あたしは考える。

やっぱりあたしが呼んでるのかなあと。

類は友を呼ぶ？

いやいや違う。そんなんじゃない。

そもそもあたしに、そういう力があるのだ。

特殊な人間を集める力が。

あたしはそこから、精鋭を選ばなければならぬらしい。

なにがあるか？

それはまだ知らない。

あたしは人を集めるだけで、指導者じゃない。

だけど、何かがあるんだってさ。
多分何かがあるんだってさ。

ちつともよくわかんないのに、人を集める力ばかりが先行している。

まったく、静かに暮らせそうにない。

ことが起こるまでは静かにと、思ってたんだけどなあ……。

二本の腕の夢と現実（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

二本の腕の夢と現実

奇術師に奇術をかけられて、鳩になったお父さんが空を飛ぶ映画を見たことがある。二本の腕を羽ばたかせて、大きな青い空を自由に、ただ自由に。

僕にだってできるだろうかと、ちょっと考えた。

ちよつと考えたら、やってみないとわからないなと思った。

やってみないとわからないと思ったら、それならやらないとなあ、と……。

僕は小さい。来年の春になれば中学生だというのに、「いつから小学生？」と聞かれることしばしだし、女の子に間違われたりするし。成長期がまだ来ていないとはいえ、この子供っぽさは、ちよつと酷い。

だからというか、なんというか。僕は子供にしかできないような、ちよつとおばかさんなことをやってみようと思ったのだ。

両手をバタバタを動かして、椅子の上から飛び上がる。

ふわりと浮き上がった体は……。

当然重力に逆らえず、どたんと音を立てて床に落ちるのだ。

当たり前といえば当たり前なのだった。

人間の手は、浮力を得るには物足りない。

胸筋だって二十倍なければ空を飛ぶには足りないらしい。

羽だってついていない。

高い丘から紙飛行機みたいなものを背負って、坂を駆け下りればきっと浮きあがるだろうと思う。家々の立ち並ぶ町並みを見下ろして、ゆっくりと滑空できると思う。

でもそれは、ちょっとちがうよなあ。

子供っぽい僕は、子供っぽさを演じている。

同級生と比べても小さい僕は、子供っぽさを演じている。

内面を覗けば僕は子供ではないし、そのくらい僕はわかってる。

多分、本当のところ僕は、同級生よりも達観しているのだ。

みんなが僕に子供を求めるのなら、そうしてあげよう。そう思うのだ。

子供っぽく見える僕が子供だと回りは安心するし、それに子供にしかできないチャレンジというものもあるのである。そういうチャレンジを、大人な人間もやってみたいものである。つまりそういうことなのである。

また椅子の上に上がり、僕は両手を鷹のように持ち上げる。ばさばさと羽ばたき、僕は頭の中で創造する。

大空を飛ぶ、僕は猛禽。

高く高く、空を舞う。

椅子の上から飛び上がる。

ふわりと浮き上がった体は……。

やっぱり重力に逆らえず、どたと音を立てて床に落ちるのだ。

当たり前といえば当たり前なのだった。

人間の手は、浮力を得るには物足りない。

子供が子供でいられるのは、いつまでだろう。

僕も歳をとる。十二歳の僕だけど、もっと幼く見えるけど、否応なしに歳をとり、大人になる。大人になれば子供を捨てなければならず、例え少しの子供を残しても、大人でなければならぬのだ。

僕もいつかは大人になる。

世界には、いつしか終わりが来るといふ。

それは遠くないと言ふ人もいるし、僕たちが死んでもしばらくは存続するという人もいる。

世界には、いつしか終わりが来るといふ。

真っ暗な夢を見たことがある。

真っ暗闇の世界の中で、ひっそりと息づく人たちの夢を、見たことがある。

多分、あれが終わった世界だ。

そこから新しい世界が生まれるのかも知れず、終わったままで死に絶えるのかも知れず……。

外見がそうだからといって、内面までも幼いと思われては困る。僕だって、世界の行く末くらい考えるのだ。

二本の腕で、空を飛んでみたいと僕は思う。

羽ばたいて、空高く飛んでみたいと思う。

子供が子供でいられる今のうちに、子供のチャレンジをしたいと思う。

あ。
大人だとか、なんだとか。言い訳なんて、どうでもいいと思うな

世界はいつしか終わりを迎える。

僕らが死んでも続くかも知れず、決してそうではないかも知れず……。

やりたいことをやらないうちに、死んでしまうなんてうそだよ。

たくさんやろう。

やりたいことをやろう。

僕はそう思うから、空を飛ぶチャレンジをする。

子供だから、甘えさせてもらって好きなことをする。

大人だから、好きなことができない？

言い訳はよそうよ。

だからって僕が大人になって、好きなことをやってるって保証はないけど……。

みんな飛べばいい。

二本の腕で飛べばいい。

現実の意味ではなくて、比喻の意味で。

僕の腕なら飛べると思う。

二本の腕で飛ぼうと思う。

終わる世界のストレンジジャーニー（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

終わる世界のストレンジジャーニー

灰色の大地を、さくさくと歩く。灰のような砂の降り積もった大地を、さくさくと歩く。足跡が点々と、道を作るように残った。

分厚い外套を頭までかぶり、とめどなく降りかかる砂のような灰をマスクとゴーグルで防ぎ、人影は薄暗い世界を歩く。

さくさく、さくさく。足跡だけが点々と、台地には残された。

大地も灰色ならば、空も灰色。

大気に舞い上がったグレーの粒子が太陽を覆い隠し、昼間なのに薄暗く、宵闇のようだ。

しんとして、冷たい空気。身震いするような気温の低さに、旅人は一つ息を吐く。マスク越しに吐き出されたそれは白く染まり、どんよりした空模様の為、灰色にも見える。

まるで砂漠のような光景だと、旅人は思った。

死に絶えた世界のようなだとも、旅人は思った。

足を止め、手袋を着けた手を懷に差し込み、地図を取り出す。

旅人にはルールがある。

一揃いの装備を持って、目的地に進み、辿り着かなければならないというルールがある。

投げ出すこと適わないそれは、旅人にとっては一つであり全てだ。

ルールに則って目的地に到達し、そして再び新たなルールを貰い、また旅に出る。

だから旅人はずっと旅人であり、いずれその域を越えるときまで、旅人は旅人だ。

今回の装備は足元まで覆った外套と、防塵用のマスクとゴーグルと、コンパスと地図。

今度の目的は単純明快で、地図に記されたすべての場所をその目で見ることに。

旅が何度目か、これはもう思い出せないほどだ。いつまで続くのか、いつになれば終わるのか、旅人にはわからない。だけど、投げ出すことはしない。

投げ出してはならないと、ルールは言っているし、旅人自身もしてはならないと思っているから、旅人は投げ出さない。

そして、なぜか分かる。

いつか旅が終わった時、旅人は名を名乗る権利と、一つの存在を与えられるのだと。

自分の生まれるその日までの旅なのだこれは。

地図に描かれた大地は八つに区切られており、うち二つは白く、残り六つは灰色に塗られている。旅人は白く塗られたうちの一箇所を、指でちゃんとつづいた。白かった一角は、まるでインクが滲むように灰色に染まる。

「七箇所目。だけど、どこに行っても同じだ」

旅人はぼつりと呟いた。少年のような、少女のような、中世的な声色だ。

旅人は、地図を染める旅をしている。

記された場所を巡り、白い地図を灰色に染める旅をしている。

地図の全てを灰に染めた時、この旅の終わる時だ。

残る白は一つ。

さくさくと、さくさくと、旅人は歩みを再開する。

山に登った。

山は石のように硬くなった切り株をいくつか残しているのみで、ただただ丸裸の、平地と地続きの灰色だった。

森に入った。

森は枝葉を失った老木が、やはり硬く石のようにいくつもそびえているだけで、灰色一色しかなかった。

川を巡った。

川は文明の名残に固められたコンクリート製の大きな溝と化しており、水の代わりに灰色の砂が降り積もっていた。

海を眺めた。

海は生命の輝き全てを閉じ込めるかのように凍結し、降り積もる灰のおかげで大地と同じ役割を果たしていた。

船が停泊していた。

船は凍結した海に縛り付けられ、その姿を灰に染め、小山のようになっていた。苦心して船内に入ると、たくさんの人骨が残されていた。

街にも行った。

街は巨大なビルの群れであったのだが、その多くが灰色の砂に飲

み込まれ、元の高さを把握することはできなかった。

そして砂漠。

人の生きている所は確認できず、ただただ灰色が続いているだけで、旅人は寒さと静けさに耐えながら、各地を歩いていった。この世界は何もかもが停止しているようだった。

昼と夜の違いは、景色が灰か黒かだけ。不可視になるため、夜は行動が取れなくなるが、それだけだった。休息のための時間と思えば、昼と夜の違いなど、ないに等しい。

残り一箇所の白。

それを求め、旅人はさくさくと、足跡を残しながら歩き続ける。

一つ夜を越え、二つ夜を越え、足跡を残しながら目的の場所を目指す。

果たしてそこに辿り着くと、この世界に来て初めての光景があった。

たくさんの死の灰の上に、無機質な小屋が建ち、窓からは煌々と明かりが漏れていた。

灰色以外の色が、そこにはあった。

旅人は小屋に近づき、ドアをノックする。程なくしてドアはギイと音を立てて開き、しかし旅人は、待望の人間との出会いを果たすことはなかった。

中から現れたのは、少女型のロボット。

「いらつしゃいませ。旅の方ですか？」

ロボットの少女は、にこりと優しげに笑んだ。

「はあ……まあ……」

ロボットが出てくるとは思わなかった旅人は、思わぬことにしどろもどろに返答する。

「来客は百十六年ぶりです。どうぞお入りください」

上品な笑顔の小柄な少女ロボットは、旅人を室内に招きいれる。

招かれるまま旅人は小屋に入り、二脚ある椅子のうち、勧められた椅子に座る。

旅人は把握した。

この世界には、生きている人間はいないと。灰色に染まってしまった世界は、人間の所業のため死に絶えてしまった世界なのだ。凍りついた海に縛り付けられた船は、死に絶えた世界から逃げ出そうとした人間の、その末路だと。

「生憎用意できるものがありませんので、雰囲気だけでもと思いついて」

少女ロボットは空っぽのティーセットを持ってきて、テーブルに置き、旅人と向かい合わせ担った椅子に座る。

「あ、お構いなく」

旅人はフードを取り、マスクとゴーグルを外す。お茶会に誘われては、礼儀を失ってはいけない。

「久しぶりのお客様。ふふ、緊張しますね」

まるで人間であるかのように、少女ロボットの仕種は全てが自然だ。

おそらくは、この少女ロボットがこの世界で唯一の住人だろう。

生物すべてはこの死の世界で生きていられようもなく、全てが過去へと過ぎ去っているだろう。

広い世界で、一人だけ生きる少女。

灰色の世界で、一人だけで生きる少女。

なにがあつたか分からないが、世界を終わらせたのは、人間の悪意の所業だということは他ならないだろう。

人によつて作られた少女は、人によつて一人にさせられ、孤独を食んで過ごしてきた。旅人は数日間、この世界を生き、静けさと寒さ、それに孤独が押し寄せる恐怖をこれでもかと味わった。人と同じようなこの少女ロボットは、きつと旅人が感じたような寂しさと恐怖を、百年以上も味わってきたのだろう。

はじけるような笑顔で、少女ロボットは話を紡ぎ続ける。

「誰かが来たら、どんな話をしようかとずっと考えていたんです」
恥ずかしそうに、少女ロボットはぺろりと舌を出した。

何年も何年も、少女ロボットは独創してきたに違いない。人恋しさを紛らわせる為、お話を考えてきたに違いない。

久しぶりに旧友に出会ったかのように、少女ロボットの話は止まらない。旅人は時折相槌を打ち、身振り手振りを交えた少女ロボットの話に聞き入った。

灰色の世界が、彩りに染まった気がした。

百年以上の無窮の時間。

辺りは夜に落ちていき、旅人は少女ロボットの寂しさを埋める行為に付き合うことにした。百年も付き合うわけにはいかないが、数

日間は付き合うことにした。

地図の残された白が、インクがにじんだかのように灰色に染まる。

旅人の小さな旅が終わりを向かえ、二人は互いの寂しさを埋めるため、音のない世界に唯一の花を咲かせる。

明滅を繰り返すとして、希望一つが残っていれば、世界から明かりが消えることはないのかもしれない。

灰の世界にあるものは、一人残された少女ロボット。
優しく笑んだ、最後の希望。

終わる世界のストレンジジャーニー（後書き）

同じ話を前にも書いた気がするが気にしないことにします。

電機花嫁のロッキングチェア（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

電機花嫁のロッキングチェア

日本の誇る自立型二足歩行ロボット、アシモを作ったのは、ガンダム世代のオタクだって話を知ってるかい？どんなジャンルでもそうだけど、革新的な何かを作り上げる存在っていうのは、決まって何かひとつのことに傾倒しているオタクだと、僕は思う。

なぜ僕がこんなことを言っているのか？

それは僕が、というか僕の一族がズバリそのままのオタクというヤツで、革新的な何かを成し遂げようとしているからだ。つまり自分自身を正当化させようと、オタクの地位を持ち上げているのである。

二十世紀後半の、いわゆる「萌えアニメ」が横行しだした時代よりは、オタクの地位は向上したとはいえ、まだまだ僕らは斜に見られている。いい大人になって、アニメに夢中だとは、とね。

実際の所、僕はオタクではない人間なんていないと思うけど。アニメやマンガに夢中になるだけが、オタクではないんだ。僕の知ってるだけでも機械部品の大好きな「工学オタク」、電卓をいかに素早く叩けるかに熱心になる「会計オタク」など、変わったオタクもいる。

熱中しているものがあれば、それでオタクだと言って過言ではないと僕は思う。

大体僕はジャンル違いの映画オタクであり、目の前にあるそれには、単純に機械設計者として携わっているのだ。白い目で見られるのは、少し違うと思う。いや、オタクを否定しているわけではないけどね。

僕の目の前で機械の椅子に揺られる彼女は、電機の花嫁。深淵の夢の底に沈み、いまだ目覚めぬ電機の花嫁。

彼女は昔流行ったアニメキャラクターの姿を模した、少女型ロボットだ。豊かに長い黒髪を持つ、少女型ロボットだ。

それこそアシモが初めて作られた頃の人気アニメキャラがモデルになっているので、僕には彼女が誰だか分からない。そもそもアニメ調ではなく、実際の人間に似せてリデザインされているので、本家を知ってる人でもわからないかと思うけれど。

だから単純に、「美少女ロボット」を作るのが僕の仕事だと思ってもらって構わない。

親子三代に渡って、僕ら一族は彼女を作り上げることに心血を注いでいる。

アニメキャラに彼女がそっくりなのは、祖父が好きだったからだそう。歳をとってから祖父さんしか知らない僕は、祖父が彼女にそんな感情を抱いていたことを知らなかったけど、父曰く「祖父さんの初恋の人」なんだとか。

人工骨格に、人工筋肉に、白い肌に麗しい顔。手足は細く、胸も薄い、成長途上の美しい少女。

ひと目見ただけではロボットとは気付かないか、それとも美しすぎて人ではないと悟られてしまうだろうか。ともかく、「美しすぎる」意外はごく自然な人間のそれである。

ただし、彼女は目覚めない。

設計開始から百年ほど経つのだろうか？

試作に試作を重ね、今では人間と見紛う程になったが、それは外見だけで、内面は違うのだ。人間と同じに感情を持ち、自ら考え、覚え、学習する。それをするには、ソフトウェアがまだ追いつかない。

だから彼女は、いまだ目覚めることができない。

目覚めることのできない人造の花嫁は、機械の椅子に揺られて眠る。

電気羊の夢でも見ているのだろうか？

彼女は夢の縁。

バースデイを心待ちにして、彼女が座るは夢の縁。

いくつもいくつも試行するけど、未だに偽者の殻を脱ぎ捨てられない、哀れな電機の花嫁。

それともこれは人のおごりだろうか？

ロボットは人に近づきたいだろうというのは、ただの人のおごりだろうか？

アニメの世界で楽しげに人と会話をするロボット達を、僕もたくさん見てきた。そこはその道のサブレッドというべき家系、その手の作品を、僕はたくさん見てきた。

作られた世界の虚構とはいえ、彼女達は楽しそうだった。だから僕たちは、彼女が人間と同じように、人間として僕たちと会話を楽しみたいと思っていると、思っている。

それは人のおごりだろうか？

キーボードのエンターキーを押し込み、最新の性格・行動プログラムを彼女に送り込む。現在時刻は深夜二時。プログラムのアップロードが終わる朝には、起動実験ができるだろう。

今度こそ、彼女は人と同じように行動してくれるだろうか？

「お休みお姫様」

頭を撫でて、雑多な物にあふれた研究室を出る。髪の毛の手触りはリアルで、サラサラとしていた。シャンプーの香りが漂ってきそうなほどで、偽物の存在だとは、到底思えない。人形としてならば、きっとこれが完成形だろう。だけど僕らは人のようなロボットを目指してきたのだから、そう見えなくとも彼女は未完成だ。

住居併設の研究所。自室に戻り、今日はシャワーを浴びて寝てしまおう。

眠り姫を起こす作業は、また朝になってからだ。

だから僕は、見逃してしまった。

だってまさか、一人で起きてくるとは思わないだろ？いくら人間を模したからといってさ。

「博士はお寝坊さんなんですネ」

優しく髪を撫でる彼女の、それが最初の言葉。

電機花嫁のロッキングチェア（後書き）

好きな嫁を脳内補完すると思います。

タイムラインの絶対矛盾（前書き）

この連載は作者本人の頭の中や読者様の指摘で「続けられそうだな」と思った部分をピックアップして続ける、文章力と発想力を衰えさせないための断続的実験小説です。

ですので、ご意見ご感想をたくさんいただけたらと思っています。

が、このシリーズは完結まで着想が出来上がりましたので新シリーズにご期待ください。

タイムラインの絶対矛盾

女生徒が理科準備室のドアをあけると、机の上に乗った小さなテレビは一昔前のアニメのDVDを再生していた。

「また見てんですか、先生」

やや呆れ口調で女生徒が言っと、

「ああ、来たね」

柔和な笑顔の理科教諭の男が、椅子を回して女生徒に振り返った。
「ただだけ見てんですか。よっぽど好きなんですね」

「いや、うん。でもほら、よく見ておかないとね、未来が変わってしまうてもよくないからさ」

「そーゆーのって、方便って言うんじゃないです？」

呆れきった表情を隠しもせず、女生徒は近くにあった椅子を勝手に引き寄せ、座る。

「こっちの方はそろそろですけど、そっちはどうなんです？」

「お姫様かい？うん、順調にいつてるようだよ」

テレビ画面では、フリフリの衣装を着込み、ステッキを振り回す少女の姿がクローズアップされている。いわゆる魔法少女ものアニメだ。

「五十年後に起動することになってるから、それじゃ、ちょっと行つてこようか」

理科教諭は言つて、立ち上がる。

「こっちからせつつかないと動かないんですね。困るんですよ、そーいうの」

「違うよ。元々、そういうことだったのさ」

理科教諭がそう言うのなら、そういうことだったのかもしれないと、女生徒は思った。彼は時間の移動が出来る人なので、未来を知っている、彼の言うことを否定は出来ないのだ。

（しかしまあ……）

女生徒は思う。この人はとてもじゃないが、変人過ぎると。女生徒は特殊な人間を見極める眼力を持っているが、この教諭は向こうから声をかけてくるまで、「そういう力」を持っているとは気づかなかった。

理科教諭に「来るべき時が来るまで、君には力を持った人間を集めてもらいたい」と言われるまで、彼のことは普通の人間だと思っていたのである。

いや、授業中に突然「あのアニメの作画は」とか言い出す人なので、ちよつと普通といいがたい部分はあるが。

だから女生徒は彼の異質さがそういう「オタク気質」から来ていると思い、特殊な力を持っているとは、だから気がついていなかった。

まったく、そんな人間がキーパーソンなのだから、困ったものだ。

「しっかりやってくださいよ。スベってもらっちゃ、困るんですから」

「そうかな。君はどっちに転んでも上手くやりそうだけだね」

「そうかもしれないですけどね。面倒ごとはもういやなんですよ」

「ははは、なるほどね」

理科教諭は笑って言って、そして……。

「お久しぶりですね、博士。それとも、初めましてと言ったほうが正確ですか？」

「うーん、まあ、どっちでもいいかな。それにしても、それ、似合うね」

「そうですか？」

モップ掛けをしていた、メイド服姿の美少女アンドロイドは笑って応じる。理科準備室で見ていたアニメDVDの、主人公キヤラクタによく似た人造の少女。

「多分お願いしていたもの、出来ているかな？」

「これですね？大丈夫ですよ、ちゃんと承っています」

美少女アンドロイドは小型の記憶媒体を取り出し、理科教諭に手渡した。

夜更けの、とある研究所の一室。

理科教諭はそつと部屋に侵入した。

灯りをつけると、機械の椅子の上で、眠ったように動かない美少女アンドロイドの姿が。

理科教諭はアンドロイドからケーブルでつながったパーソナルコンピュータを起動させ、記憶媒体を接続し、アンドロイドに起動プログラムを送り込んだ。

美少女アンドロイドは静かに目を開き、半身を起こす。

「僕のが分かるかい？」

「ええ、初めまして、博士。それともお久しぶりですと言ったほうが正確ですか？」

「うん、まあ、どっちでもいいかな。やっぱりこっちの衣装がしっくり来るな」

「そうですか？」

目覚めたばかりの眠り姫は、自分の姿を眺め見た。一昔前の魔法少女もののアニメの主人公によく似た少女は、アニメの中の衣装とそっくり同じものを着ている。

「これから二十年の間、起動プログラムを含めた様々なデータをなるべくたくさん保存しておいて貰いたいんだ。君が困らないようね出来るかい？」

「はい、承っています。お任せください」

理科教諭はアンドロイドが頷いたことを確認し、そして……。

理科準備室の机の上のテレビでは、アニメのDVDが再生されていた。お気に入りの魔法少女ものの、一昔前のアニメだ。

「おかえんなさい。どうでした？」

「うん、全てうまく行ったよ。多分ね」

「多分じゃ困るんですけどね。先生のそいつ次第で、どうなるかわつちやうんですから」

机に肘を突いてアニメを眺めながら、女生徒は懽然として呟いた。
「やることはやったんだもの、これ以上は僕には不可能さ。でもさ、大体の未来で上手くいつてるんだから、平気さ」

「上手くいく確率、聞いていいですか？」

「不確定なものだよ、論じて何の意味があるんだい？」

「ったく」

この理科教諭は、全く変な人である。

特殊な技能を持っているからとか、そういうところは別な所で変な人である。

科学を専攻していたはずの人間が、確率なんて不確定だと、切つて捨てるのか全く。

「五十年後にお姫様を起動させるために、そのためのプログラムを七十年後のお姫様から貰ってきたんですよね？それってそのプログラム、どこから来たんですか？」

「ああ、それ、ドラえもんでも言ってたなあ」

五十年後の眠り姫を、七十年後から二十年の歳月を遡り、機械仕掛けのキスで目覚めさせる。

ないはずのプログラムが存在することになり、そしてそれが未来の契機になり……。

煙に巻かれた時間の流れ。

パラボックスの扉は開かない。

「本当の作者は、誰なんだろうね？」

知らないということこそが、人間の真理。

ライムライトの向こうから

明るく空が輝いて、少女が降ってきたって言ったら、誰か本気にするヤツがいる？金曜の晩にテレビでそんなの観たって？そりゃ天空の城ラピュタだよ、空想の話じゃんか。信じるやつなんか、まあいないだろうね。あたしだってそうだよ。普通そんなもの、信じやしない。だから雲間から光が差して、それが起こったときには、思い切り頬をつねったもんだよね。

何の話かって？

さあ、何の話だろう。

ひとつだけ言っとく。

降りてきたのは、ただの少女じゃなかったよ。

世界の行く末を、大きく変えるヒトだったのさ。

予定通りに集まったあたしたちの前に、その人はゆっくりと光の中から歩み出て……ね。

シルクのようなつややかな黒髪が、真っ白な床に広がっている。安らかな寝息を立てるその人は、白いシルクのシーツを掛けられて、胸のふくらみは小さく上下している。色白の美しい少女が、無防備に横たわっていた。

「ん……」

小さく吐息を漏らし、少女は寝返りを打つ。と、何かが手に触れた。

「ん……？」

ゆっくりと目を開き、指先のその先を確認すると、そこに何かが立っていた。小さな白い毛むくじやら。白い兎が。

「お寝坊ですな、お嬢様」

白い兎が口を利いた。

「ええ？」

少女は驚き、身を起こす。

「おっと、いけない」

直立する白兎は杖を取り上げ、少女のからだからずり落ちそうになったシルクのシーツを抑えた。

「何もお召しでないのだから、急に起き上がっちゃいけません」

「はあ……」

少女がシルクのシーツを片手で抑えると、白兎は杖を外し、床に突く。燕尾服にシルクハットの、慇懃な白兎。

「お嬢様って……？」

「あなた様のことです」

「あ、やっぱり女の子なんだ」

「ようやつと決まりましたな」

少女は立ち上がり、シルクのシーツを体に巻きつける。まるでシルクのドレスとなったそれは、少女のささやかな体のふくらみを明らかにする。

「急ぎましょう。もう時間がありませんぞ」

白兎は杖を突き、少女を先導して歩き出した。真っ白な床、真っ白な壁、真っ白な天井。全てが白い部屋の中。そのなかでたった一つ、黄金に縁取られた豪華なドアが、異彩な輝きを放っている。

「あの、どこに行くんですか？」

シルクを引きずりながら、少女は白兎についていく。白兎は部屋の奥彼方に見える豪華なドアに向かっていった。が、少女が問いたい

のはそこではない。ドアからどこかに出るのはわかる。そこから先はどこのかと、そう問いたいのだ。

「不思議なことをおっしゃいますな。お嬢様は、わかっておいででしょう」

「わかってますか」

「わかってますな。いくつもごらんになられたでしょう?」

「はあ、そういえば色々」

「それで結構。私には行く先なんぞはわかりかねますが、お嬢様はわかっておいでだ。なにせ、ご自身でお決めになるのですから」

「僕が決めてもいいのかな」

「ほっほ、まだ少し混じってらっしゃる」

白兎は快活な声を上げて笑う。ぴよこぴよこと、二足歩行の白兎。その後ろから、白いシルクのドレスの少女。白い部屋の中、白い人影が進んでゆく。

「何の因果か、託されてしまった。あなた様の責任ではありませんが、それでも決めねばなりません」

「うーん、あらかたは決まってるんだけど、でも……」

「妙な憂いを抱えていらっしゃる。あなた様の決断に逆らうものなど居りますまい」

「明るい方ですよ、行く方は。でも……」

「ふむ……」

白兎は歩きながらひげを触った。ピンと伸びた、兎のひげ。白い世界にぴったりの、やはり白い色のひげ。

「いくつの現在をご覧になった?」

「わかりません。多分、たくさん」

「いくつの未来をご覧になった?」

「わかりません。多分、たくさん」

「一つを選ぶことは出来ませんか?」

「たくさんが消えてしまうから」

「ふむ……。なるほどお嬢様はおやさしい。ですが全ては可能性だ。

本当のものは、これから先に生まれるのですよ」

白兎は立ち止まった。黄金に縁取られた、豪華なドアが眼前にある。少女もまた、立ち止まった。シルクの衣擦れの音がかすかに鳴る。

「ご覧になったいくつもの現在は、今を生きる友人たち。ご覧になったいくつもの未来は、これからたどり着くかもしれない未踏の地」
「明るい方にといいたって、そのうちのいくつかは消えてしまっただよね」

少女はそつと扉を撫でる。

「消えるではありません。最初からありはしないのです。幸せなものを選んでお進みなさい。いずれたどり着いた未来が、本物の世界ですよ」

「困っちゃうな、幸せなものは、全部ほしい」

「やれやれ、贅沢なことですな」

少女ははにかんで笑い、白兎はやれやれと頭を振る。

少女がドアを押すと、巨大なドアは静かに開き始めた。ドアの間からまばゆい光が差し、二人の影は背後に大きく伸びる。

「いってらっしゃいませ。よりよい世界を」

白兎は頭を下げ、少女をドアの向こうへ見送った。光の向こうに見送った。

少女はやがて影となり、光に飲み込まれ……。

指導者様が歩み出て、あたしは思わず目を疑った。空から降った少女のごとく、ごくごく普通の女の子だったからだ。年齢で言えば、多分あたしよりも年下だろう。あたしだけでなく、みんながみんな

目を疑ったことだと思う。

かすかに男どもが色めき立ったのは、その子が裸に白い布を巻きつけただけの姿だったからだと思う。こんな子どもになに考えてんだか、このロリコンどもは。

ともかくその場にいた全員が、指導者さまについていくことを誓ったのは間違いない。

光から出てきた神々しさに、ではなく、あまりのその普通さに、か弱さに、「守ってやらな！」と思ったのだ。

その選択は間違っちゃいなかったと思うよ。

だって独裁者に従うよりは、一緒に未来を作る感じがするじゃない。

明るい方へ、明るい方へ……ってね。

繋ぐ世界の未来予想図

男は手首を回し、カラカラとグラスの中の氷をかき回した。汗をかいたグラスの中身は、半分ほど飲み込まれたあとのアイスコーヒ。炎天下にやられた体に染み渡る、空調よりもよく冷えたアイスコーヒ。

「だいぶ方向性は定まったようだね」

男はストローに口をつけ、アイスコーヒを一口飲んだ。男にはやや濃かったアイスコーヒは、氷が溶けたことでちょうどよい濃度になっている。

「簡単に満足そうに言わないでください。僕はとてもじゃないけど恥ずかしかったんですからね」

お盆を両手で抱えたウェイトレス姿の長髪の少女が、不満そうに頬を膨らませた。

「あはははは。運命のあの日か！いや、あの場にいた男たちには眼福だったよ」

大きな声で男は笑う。

あの日。運命の日。光の中から歩み出た少女は、シルクの布一枚体にまとっただけの半裸姿だった。現世に生まれ出でた少女がその後自身の姿を省みて、あわてて体を抱いて座り込んだのは言うまでもない。

「でもあそこで君が方向性を正さなければ、今の世界はなかったんだからね。アレはいわば、伝説の景色だな」

「新聞にも載っちゃったし、僕、外に出ると結構指さされるんですよ？もう外に出たくありませんよう」

少女はため息をつく。小さなカフェの静かな空調の中、カウンターの向こうで店主が小さく笑った。

「ま、それは仕方ないさ。そうでなければ、時代は動かないんだよ」男はクスクスと笑う。少女の一生の恥は、男にとっては小さな笑

い話にしか過ぎない。知り合いがちょびつとテレビに映っただけという程度のものである。

「大体、あの写真が新聞に載らなかったら、超常能力者の存在も明るみにならなかったんじゃないですか？」

「それはどうか。不良書籍調整者など、すでに異能者の存在は明るみになってるんだ。いずれ、暗い未来が訪れたかもしれない。君の登壇は、必然だったのさ」

「服くらいは用意してもらいたかったですけどね！僕は！」

少女はむくれている。

しかしながら、少女が方向を変えたことは、確かなのだ。

超常能力者の存在は、普通人たちを不安にさせる。それは特殊な才能を発露させただけともいえるのだが、人と人との間に巨大な壁を作ってしまうことに変わりはないかった。

少女が旅人として歩いてきたいくつもの未来。それらは決まって絶望の末路にあり、緩やかな衰退が避けようもなく横たわっていた。僅かないくつかは、それなりの幸福に満ちた世界があつたが、ほんの一握り。

世界は滅びの道を、レールに乗って進んでいたのである。

異能者たちと普通人たち。巨大な壁に阻まれた彼らは、争いを余儀なくされていた。迫害を恐れた異能者たちは逃げ隠れ、普通人たちは彼らを追い立てた。そして、逃げ切れなかった異能者たちは、普通人たちを自らの命のため傷つけたのである。

致し方のないことだ。だれもが死にたがらず、命を永らえたい。そして大多数に追われる少数でありながら、一人の力は大体が一騎当千。追うも追われるも、不安を増大させてきたのである。

戦争が起こり、滅びの道は終着に近づく。

列車はスムーズにレールをすべり、音もなく進む。

気付かぬうちに終わりに近づき、人々は選択肢のいくつかを消される。それも、明るい 方の選択肢を。

少女はその方向を、変えた。

レールの分岐点のレバーを押して、右から左、列車の行く先を変えたのだ。

異能者たちは彼女の意思に従い、自ら進んでその存在を名乗り出した。逃げ隠れることで不安を呼び起こすなら、最初から白日の元に出ればよいのだ。

能力者たちは、それぞれに有能だった。たとえば節子さんと呼ばれる電子生命体は、大切なデータを犯罪者たちに盗まれそうになったとき、ネットワークの世界でそれを食い止めることが出来る。ネットワークを介して襲ってきた犯罪者たちを感知し、撃退することが出来るのだ。その気になればネットワーク回線をことごとく占拠し、自分の力に出来るので、ネット上で彼女はほとんど無敵である。ただし甘やかされてわがままなため、扱いづらいことが難点だが。

このように、異能者たちは場所場所ではてきめんな成果を挙げているのだ。

犯罪に走る異能者たちもいるが、ほとんどは大人しく、常識のある人たちである。

進んで善行を行う彼らを、世論は受け入れた。猫かぶりだと言う人たちも多数居たが、実際に数多くのことで手助けとなっているのだ。翻される反旗は、弱弱いものだった。

「君のおかげで、これからの未来は明るいほうに行きそうだね」

「わかりませんよ？こんなコムスメですから、どこかで落胆されてみんな離れていくかもしれませんからね」

「それはなさそうだ。こつちに來た時点で君の超常さはもうなくなった。だから落胆するなら、もうしてるんだよ。僕らはみんな、君の人柄に惚れたんだ」

「かつこいいこというんですね」

「ああ、それとささやかなおっぱいにも惚れたかな」

「台無しですね」

少女は言っ、お盆を胸の前まで動かす。ささやかで悪かったなと、ちよつとだけ男をにらんでおいた。

「とにもかくにもさ」

男はアイスコーヒーの残りを全て飲み干し、

「最悪はもう免れたよ」

笑って言っ、グラスを置いた。グラスの横に代金を置いて、男はカフェを出る。カランコロンとドアベルが鳴る。

「ありがとうございましたー」

義務的に、少女は言っ。

世界は一体どちらの方が。

上手くいつてる今のところに、どこかで再び転換があるのか。

雑多な未来は、もう未来見でさえ見通せない。

人類全てがその手をつないで、やがてみんなで、未来の方へ。

繋ぐ世界の未来予想図（後書き）

バトントッチショートストーリー・ストレンジジャーニー 終了

皆様読んでくださってとてもありがとうございます。

シリーズを変えて続けたいので、そのときはまたよろしく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2166j/>

ボタンタッチ・ショートストーリー

2010年10月15日12時49分発行